

# 研究紀要

第17号

2002

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 研 究 紀 要

第 17 号

2 0 0 2

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 目 次

序

## [論文]

- 砂川期の基礎的研究(1) ……………西井 幸雄 ( 1)  
—大宮台地、武蔵野台地、相模野台地を中心として—
- 諸磯式土器の変遷過程……………細田 勝 ( 29)
- 大宮台地における環濠集落の基礎的研究(1) ……………福田 聖 ( 61)  
—井沼方遺跡— 1 —
- 手焙形土器の形と型……………高橋 一夫 ( 91)  
—足守川遺跡群を中心に—
- 埴輪の地域性……………若松 良一 (101)  
—紀伊の埴輪のありかたから探る—
- 古代東国と豪族の家……………田中 広明 (129)

# 埴輪の地域性

—紀伊の埴輪のありかたから探る—

若松良一

**要約** 紀伊は畿内に近接していながら埴輪の導入が遅れるいわば埴輪文化後発地帯であるが、紀氏の勃興、成長と軌を一にして古墳時代中期以降に独自の埴輪文化を花開かせた。それは淡輪技法と呼ばれる須恵器技法の円筒埴輪と後期における双脚輪状埴輪などの地域性であった。5世紀に成立する紀伊型埴輪は埴輪終焉期の箱谷3号墳例にいたるまでヨコハケが残存する特異な円筒埴輪であるが、車駕之古址古墳のB類円筒埴輪の流れを汲むもので、蓋などの器台から普通円筒に変化したB類には保守性が強いことと、関東地方との共通性も確認された。

## I はじめに

埴輪は吉備地方の特殊器台形土器を起原とし、大和東南部で埴輪としての形態が出来上がって、九州から東北地方までの全国に伝播した。筆者が暮らす埼玉県も埴輪の伝播した地域であり、300基以上の古墳から埴輪が出土し、その生産遺跡数は12箇所と全国最多である。埴輪の形制は近畿地方のものとは大差はないが、受容時期は大幅に遅れて、5世紀初頭前後である（註1）。また、6世紀代に人物・馬・家・器財など多種類の形象埴輪が盛んに生産され、群集墳中の小古墳にまで供給されて、西暦700年前後まで存続したことは近畿地方とは多様に様相が異なっている。

このような差異のうち、まず受容の時期については、埴輪が古墳を築造する階級の占有物であることからすれば、当該地域における階層社会の形成と権力者の登場が埴輪受容の遅速と関連することは当然であり、また彼らが和やより近い埴輪受容地域と密接な政治的同盟関係にあることが埴輪を享受する上での必要条件となったであろう。

さらに、いったん受容された埴輪の内容が、時間の経過とともに畿内と異なったものに受容することは、受け身の立場から主体者へと変化したためであり、創意による新形式の発生や逆に古い形式を長く踏襲する保守性などの地域性が生まれることとなる。とくに、当該地域の社会的発展に伴って社会構造の変革が行われ、埴輪の被供給階級が拡大し、これに対応して大量の埴輪が生産されたことも関東地方全体の著しい特徴とすることができる（註2）。

このような埴輪の地域性を究明する上で、関東地方を離れて、他の地域に注目してみることも無駄なことではあるまい。他地域と比較することによって、関東地方の埴輪の地域性との異同がより明瞭となり、客観化されるからである。そこで、筆者は近畿地方に所在するにもかかわらず、埴輪の伝播が遅い点で埼玉県と共通し、地形・地理的に限定性があるために地域内の埴輪の動態を把握しやすい和歌山県を、この問題を考えるためのケーススタディとして取上げることにしたい。

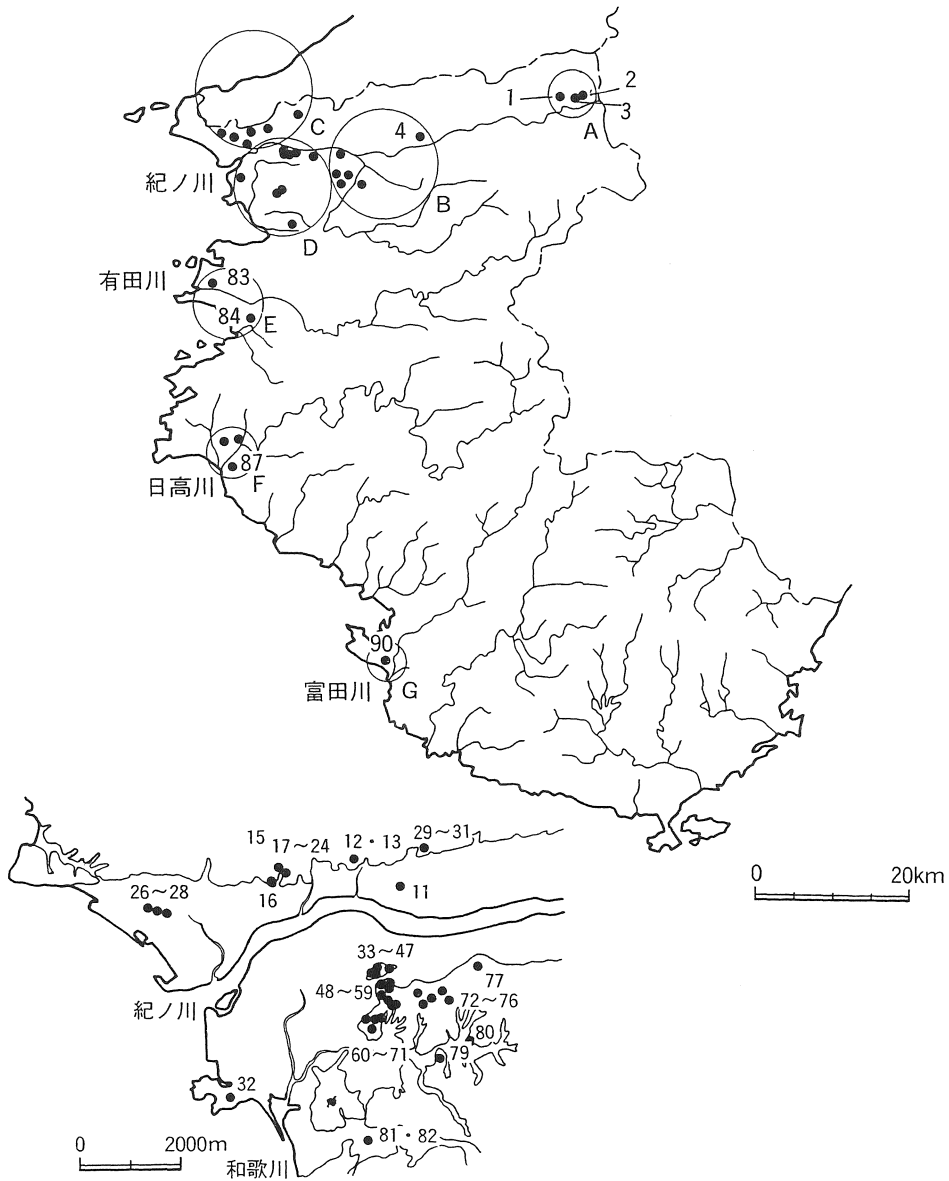
## II 和歌山県の地形・地理の概略と埴輪分布

和歌山県は現在は近畿地方に属しているが、歴史的には畿外にあり、文武天皇の時代には南海道に編入されている。大和から見れば、紀淡海峡を経て淡路、阿波へと延びる海の道の基点としての

第1表 和歌山県埴輪出土古墳地名表（註6文献より転載）

番号	古墳名	所在地	時期	墳形	規模(m)	内部主体
1	陵山古墳	橋本市古佐田	5世紀前半	円墳	46	横穴石室
2	霜山古墳	橋本市上兵庫	4世紀後半			
3	上兵庫古墳群	橋本市上兵庫	5世紀前半			
4	三味塚4号墳	那賀郡打田町中井阪	6世紀前半	前方後円墳	25	
5	高尾山2号墳	那賀郡貴志川町高尾	6世紀中	円墳	13	竖穴石室
6	高尾山4号墳	那賀郡貴志川町高尾	6世紀中	円墳	16	竖穴石室
7	平池1号墳	那賀郡貴志川町長原	6世紀初頭	前方後円墳	28	—
8	三味塚古墳	那賀郡貴志川町神戸	6世紀	造出付円墳	40	—
9	罐子塚古墳	那賀郡貴志川町神戸	5世紀中	造出付円墳	40	
10	丸山古墳	那賀郡貴志川町神戸	5世紀中	造出付円墳	42	組合石棺
11	北田井1号墳	和歌山市北	5世紀末	円墳	14	不明
12	六十谷1号墳	和歌山市六十谷	5世紀	方墳		
13	六十谷2号墳	和歌山市六十谷	5世紀	前方後円墳	25	
14	鳴滝2号墳	和歌山市善明寺	6世紀前半	円墳	25	
15	雨が谷3号墳	和歌山市楠見	6世紀前半	円墳		
16	大谷古墳	和歌山市大谷	5世紀末	前方後円墳	70	石棺直葬
17	晒山1号墳	和歌山市楠見中	5世紀	円墳	25	粘土椀
18	晒山2号墳	和歌山市楠見中	6世紀前半	前方後円墳	30	木棺直葬
19	晒山3号墳	和歌山市楠見中		円墳	—	
20	晒山4号墳	和歌山市楠見中	6世紀	円墳	12	横穴石室
21	晒山5号墳	和歌山市楠見中		円墳	20	
22	晒山6号墳	和歌山市楠見中	6世紀初頭	円墳	12	不明
23	晒山7号墳	和歌山市楠見中	5世紀後半	円墳	10	—
24	晒山10号墳(背見山古墳)	和歌山市楠見中	6世紀中	前方後円墳	35	横穴石室
25	高芝古墳	和歌山市柴谷	6世紀	前方後円墳		
26	釜山古墳	和歌山市木ノ本	5世紀中	円墳	40	箱式?
27	車駕之古址古墳	和歌山市木ノ本	5世紀中	前方後円墳	46	
28	茶臼山古墳	和歌山市木ノ本	5世紀後半	前方後円墳		
29	八王寺山9号墳	和歌山市弘西	5世紀	円墳	28	
30	八王寺山10号墳	和歌山市弘西	5世紀前半	円墳	30	
31	八王寺山12号墳	和歌山市弘西	5世紀	円墳	19	
32	高津子山古墳	和歌山市新和歌浦	5世紀	円墳		
33	花山2号墳	和歌山市岩橋	6世紀初頭	帆立貝式	67	不明
34	花山6号墳	和歌山市岩橋	6世紀前半	前方後円墳	49	横穴石室
35	花山8号墳	和歌山市岩橋	5世紀前半	前方後円墳	52	粘土椀
36	花山10号墳	和歌山市岩橋	5世紀	前方後円墳	44	
37	花山12号墳	和歌山市岩橋	6世紀	円墳	20	不明
38	花山20号墳	和歌山市岩橋	5世紀中	前方後円墳	35	不明
39	花山33号墳	和歌山市岩橋	6世紀前半	前方後円墳	32	横穴石室
40	花山36号墳	和歌山市岩橋	5世紀初頭	前方後円墳	42	竖穴石室
41	花山41号墳	和歌山市岩橋	5世紀	円墳		
42	花山42号墳	和歌山市岩橋	4世紀末?	円墳	10	礎床
43	花山44号墳	和歌山市岩橋	5世紀前半	前方後円墳	40	粘土椀
44	花山45号墳	和歌山市岩橋	5世紀	造出付円墳	16	不明
45	花山46号墳	和歌山市岩橋	4世紀?	円墳	13	竖穴石室
46	花山51号墳	和歌山市花山	6世紀	円墳	13	
47	花山97号墳	和歌山市花山	6世紀	円墳		
48	大谷山4号墳	和歌山市花山	6世紀中	円墳	18	横穴石室
49	大谷山5号墳	和歌山市花山	6世紀後半	円墳	19.5	横穴石室
50	大谷山6号墳	和歌山市花山	6世紀初頭	前方後円墳	25	横穴石室
51	大谷山20号墳	和歌山市花山	6世紀	前方後円墳	37	竖穴石室
52	大谷山22号墳	和歌山市花山	6世紀前半	前方後円墳	67	横穴石室
53	大谷山27号墳	和歌山市花山	6世紀初頭	前方後円墳	21	横穴石室
54	大谷山28号墳	和歌山市花山	6世紀初頭	前方後円墳	25	横穴石室
55	大目山1号墳	和歌山市花山	6世紀初頭	前方後円墳	31	不明
56	大目山18号墳	和歌山市岩橋	6世紀前半	前方後円墳	28	横穴石室
57	大目山35号墳	和歌山市岩橋	6世紀前半	前方後円墳	73	横穴石室
58	大目山43号墳	和歌山市岩橋	6世紀前半	円墳	15	横穴式石室
59	大目山63号墳	和歌山市岩橋	5世紀中	円墳	25	粘土椀
60	井辺前山1号墳	和歌山市岡崎	6世紀	円墳		
61	井辺前山3号墳	和歌山市岡崎	6世紀	前方後円墳	40	横穴石室?
62	井辺前山8号墳	和歌山市岡崎	6世紀	円墳	18	
63	井辺前山9号墳	和歌山市岡崎	6世紀	円墳	18	
64	井辺前山10号墳(八幡山古墳)	和歌山市岡崎	6世紀	前方後円墳	88	—
65	井辺前山13号墳	和歌山市岡崎		円墳	15	
66	井辺前山20号墳	和歌山市岡崎		円墳	15	
67	井辺前山22号墳	和歌山市岡崎		円墳	12	
68	井辺前山26号墳	和歌山市岡崎	6世紀初頭	前方後円墳	19	竖穴石室
69	井辺前山32号墳	和歌山市岡崎	6世紀前半	円墳	12	竖穴石室
70	井辺前山33号墳	和歌山市岡崎	6世紀前半	円墳	9	
71	井辺前山36号墳	和歌山市岡崎	6世紀前半	円墳	45	竖穴石室
72	前山A58号墳	和歌山市岩橋	6世紀	円墳		
73	前山B108号墳	和歌山市岩橋	6世紀	円墳		
74	知事塚古墳	和歌山市岩橋	6世紀	前方後円墳	30	横穴石室
75	將軍塚古墳	和歌山市岩橋	6世紀	前方後円墳	42	横穴石室
76	万葉植物園	和歌山市岩橋	6世紀	円墳		
77	和佐5号墳	和歌山市下和佐	6世紀前半	円墳	11	
78	東国山1号墳	和歌山市新庄	6世紀前半	円墳	15	竖穴石室
79	峯古墳	和歌山市奥須佐	6世紀中	円墳	16	
80	桶1号墳	和歌山市木枕	6世紀前半	円墳	13	

81	山崎山8号墳	海南市山崎山	6世紀前半	円墳		
82	山崎山12号墳	海南市山崎山	6世紀前半	円墳		
83	一本松古墳	有田市箕島	6世紀	円墳	12	横穴石室
84	天神山古墳	有田郡湯浅町別府所	5世紀後半	円墳	30	箱式石棺
85	向山4号墳	日高郡日高町荆本	6世紀前半	円墳		横穴石室
86	天田20号墳	御坊市塩野町北塩野	6世紀前半	円墳		
87	天田28号墳	御坊市塩野町北塩野	6世紀前半	前方後円墳	30	竖穴石室
88	箱谷1号墳	日高郡川辺町鏡巻	6世紀前半	円墳	16	横穴石室
89	箱谷3号墳	日高郡川辺町鏡巻	6世紀前半	円墳		
90	権現平1号墳	西牟婁郡白浜町才野	6世紀前半	円墳	21	箱式?



第1図 和歌山県埴埴輸出古墳分布図（番号は第1表に対応）

位置付けがあったのである。

地形的には紀伊半島が南へ大きく張り出すが、県域全体に山がちで、平地に乏しい。したがって、農業生産基盤は紀北の紀ノ川河口付近に形成された和歌山平野を除けば、紀北では紀ノ川中流域とその支流貴志川の流域、紀中では有田川と日高川河口付近、紀南では田辺湾周辺と富田川河口付近にわずかな平地があるに過ぎず、古墳の分布もこうした地域の海浜よりの砂州、丘陵、山脚部などにほぼ限定されている。

紀伊は地理的には、和泉、大和、伊勢と国境を接している。和泉との境界には和泉山脈が横たわっているが、和歌山市北部では標高を減じており、孝子峠（現在の国道26号線ルート）を越えれば、比較的容易に大阪府泉南郡岬町へ至ることができる。また、大和南部からは吉野川・紀ノ川沿いに南下し、奈良県五條市付近で真土峠を越え、和歌山県橋本市を經由して和歌山市加太へ向かうことができる。これは現在の JR 和歌山線や県道粉河加太線がほぼ踏襲しているルートであり、律令時代の初期南海道に相当する（註3・4）。御所市鴨神遺跡では古墳時代の道路遺構が検出されている（註5）ので、風の森峠越えの前身道路は古墳時代後期以前に大和と紀伊を結んでいた主要道路であった可能性が高い。

この二つの幹線交通路のほかは、海浜沿いの細い道が早くから切り開かれ、現在の和歌山市から南下した後、熊野灘に沿って北上しながら伊勢に向かっていたと考えられるが、徒渉点が多く、断崖なども通過しなければならない難路であり、海路の利用も併用されていたことであろう。また、大和の宇陀付近から吉野・熊野山中を南下して新宮方面に至る修験者の道は、かりに前身ルートが古墳時代に存在していたとしても、往来は乏しかったものと思われる。

このような地形・地理的制約によって半閉塞地ともいえる古墳時代の紀伊地方において埴輪がどのように受け入れられ、さらに地域内でどのように生産と供給がなされたのか。まず、埴輪出土古墳90基の地名表（表1）と分布図を河内一浩氏が公表されている（註6）ので、引用させていただきたい。

河内氏は埴輪出土古墳の分布を読み取ると、全県を7つの地域に分ける事ができるとする。A 地域は紀ノ川上流域、B 地域は紀ノ川中流域、C 地域は紀ノ川下流右岸域、D 地域は紀ノ川下流左岸域、E 地域は有田川流域、F 地域は日高川流域、G 地域は富田川流域となる（第1図参照）。このうち、C と D の紀ノ川下流域が県内出土古墳の48%を占め、とくに D 地域の岩橋千塚古墳群が質量ともに他地域に抜きんでいるという。岩橋千塚古墳群は県内最大の古墳群で、大小約600基の古墳が密集しているのもっともなことである。

これとは対照的に、紀中と紀南の境界にある F 地域にはわずか5基、紀南の G 地域には白浜町権現平1号墳の1基しか埴輪出土古墳が認められていないことは、紀伊における埴輪分布の北高南低という極端な非均一性を示すものである。また、F・G 地域は川西編年V期の埴輪に限定されていて、他地域には先行するIV期以前の埴輪が存在していることからすれば、紀伊という地域内では北部から南部へ埴輪が遅れて伝播したことを知ることができる。このことは文化の伝達ルートが北から南への一方通行で南部が地勢的には袋小路であったことを示しているように思われる。

畿内周辺部において最も伝播の遅れた紀中と紀南の埴輪はどのような特徴を持っているのか。実

際に熟覧させていただいた川辺町箱谷3号墳出土資料と湯浅町天神山古墳出土資料を中心に、いくつかの実例を次の章で、取上げてみることにしよう。

### Ⅲ 埴輪寡少地域たる紀中・紀南の実例

#### 1 日高郡川辺町箱谷3号墳の例

##### (1) 古墳の概要

箱谷3号墳は安珍・清姫の伝承で有名な道成寺の裏山にある。他の4基とともに箱谷古墳群を構成するが、蜜柑畑の造成によって、墳丘の明確なものは2号墳と3号墳のみである。発掘調査の結果、3号墳は直径18mの円墳と考えられた。主体部は全長4mの横穴式石室で、玄室が横長のいわゆるT字形石室である。用材は地元産の砂岩であるが、羨門部扉石のみ有田川以北で産出する変成岩が用いられていた。T字形石室は岩橋千塚古墳群に類例があるが、紀南では初めての例となる。また、通廊部（玄室前道）と基石を設ける手法も岩橋型と共通している。

埴輪は原位置のものはなかったが、墳丘北側の周溝付近から円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪が、横穴式石室の前庭部（墓道崩土中）からは人物埴輪胴部片、鞍形埴輪、囀形埴輪（筆者註一家形埴輪の屋根一）が、その西側からは円筒埴輪、家形埴輪の堅魚木、馬形埴輪（筆者は実見していない）が出土している。鞍形埴輪は県下初見である。

副葬品として直刀、鉄鏃、刀子、鉄地金銅張楯円形鏡板、雲珠、銀環、銅環、玉類、各種須恵器、土師器製塩土器などが出土している。報告では遺物の出土状況などから3次にわたる埋葬が確認されるとする。また、築造時期は須恵器で見ると、6世紀中葉から後半まで使用されたと考えられ、形象埴輪を持つ古墳としては、紀伊でも最も後出のものと言えるという（註7）。和歌山市中心部からは直線距離で約40km離れている。

##### (2) 円筒埴輪の特徴

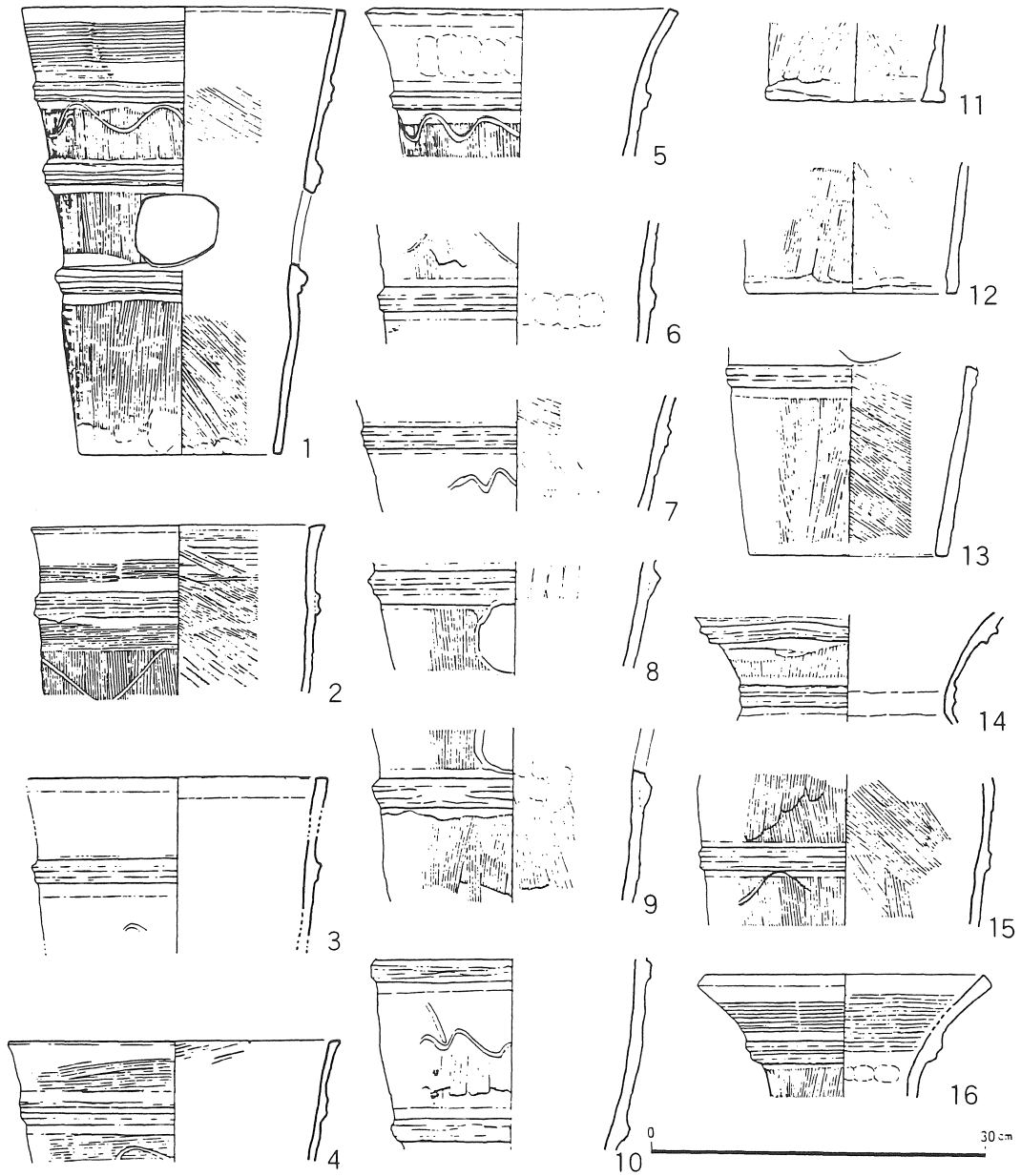
円筒埴輪（第2図・註8）は完形に復原されたものは3条凸帯4段構成で、口径30.5cm、底径19cm、器高42cmを測る。器形は直口縁で、体部が直線的に開くが、底径が大きいので、安定感（第5図参照）がある。凸帯の位置に注目すると、第1凸帯の位置が高く、第1段は他段の約2倍の高さになっている。第2段から第4段はほぼ均等である。

外面調整は第1次調整がタテハケで第4段のみ（一部資料に第3・4段）第2次調整の粗いヨコハケを加えている。内面調整は左上りのナナメハケが施されている。透孔は円形で、第2段と第3段に直交して穿たれている。口縁端部は外側に肥厚し、端面が平坦面をなす。第4段のヨコハケは口縁端部には及んでいないため、無文帯が巡るように見える。このヨコハケは第2図16の口縁部にも認められるが、口径の小さい朝顔形埴輪となるのか蓋などの器財埴輪となるのかは判断が難しい。

凸帯は総じて扁平で幅の広いことを特徴としているが、断続ナデ技法は認められないようである。底部はやや厚くなるものと薄いものがあり、第2図1の資料では底部外面のハケメが消えており、板押えの底部調整を伴う可能性が高い。

第4段外面にはいずれの個体にもヘラ描きのやや太い波状文が一巡している。焼成は土師質で淡褐色を呈し、やや軟質な印象を受ける。胎土は河内氏の観察（註9）に依れば、1mm大の砂粒を含





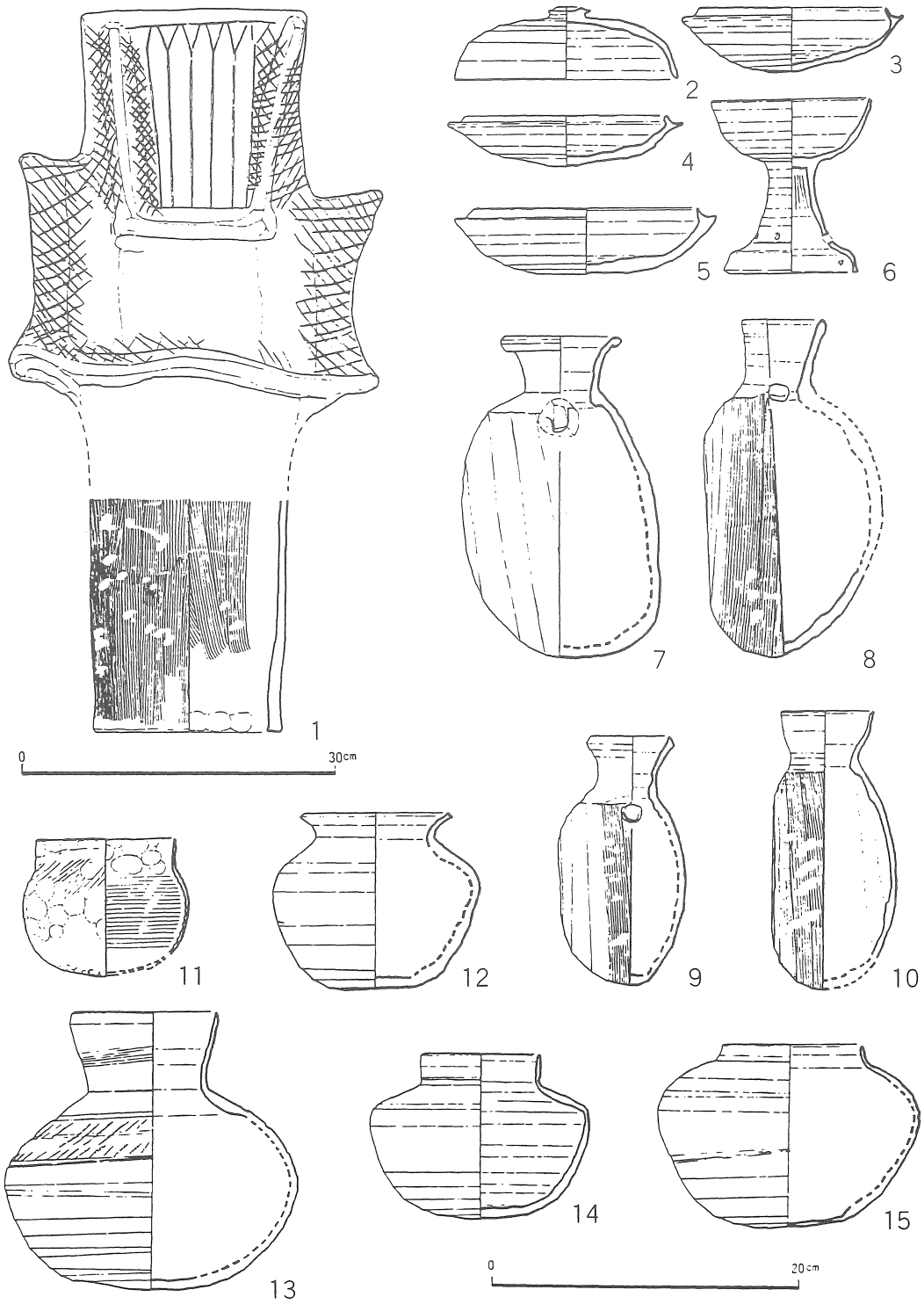
第2図 箱谷3号墳出土埴輪実測図（註8文献より転載）

むが、片岩は全く認められないという。

### (3) 埴輪の製作時期

埴輪の製作時期については、報告書では6世紀中葉から後半とするが、河内氏は異なった見解を取り、副葬品の須恵器をMT15~TK10型式とみて6世紀前半に比定する。

筆者も須恵器を熟覧させていただいたが、第3図2には窯壁が付着しており、すべて在地産の可能性が高い。第3図5の坏身は口径17cmを測る超大型品であるが、立上り部が短く、内傾することから陶邑編年（註10）のⅡ型式4段階から5段階の過渡期に相当するとみられよう。第3図4の



第3図 箱谷3号墳出土土甕形埴輪・土器実測図（註8文献より転載）

坏身は偏平化し、調整が粗雑であることからⅡ型式5段階に相当しよう。第3図2の有蓋高坏の蓋はⅡ型式4・5段階に見られるものであるが、沈線による稜を伴っておらず、後出的である。第3図6の無蓋高坏はⅡ型式6段階まで下降する可能性がある。

提瓶は大小4点あるが、把手は鉤状もしくは無く、Ⅱ型式4段階及び5段階に相当しよう。第3図7は口縁部が外反しており、やや古い特徴を残すが、他は口縁部が直立し、新しい。また、第3図9・10は小型化が著しく、Ⅱ型式5段階に相当しよう。

第3図12は無蓋の、第3図14・15は有蓋の短頸壺である。陶邑ではⅡ型式4段階に出現する器種であるが、5段階においても形状にほとんど変化がないとされている。しかし、6段階においては肩部の張りを失い丸く変化するので、第3図15は該期に相当しよう。

第3図11は土師器製塩土器で、益田雅司氏の研究（註11）に依れば、丸底Ⅰ式に相当し6世紀代に比定されるが、器形はⅡ型式4～5段階の須恵器を伴出した秋葉山1号墳のものと酷似している。

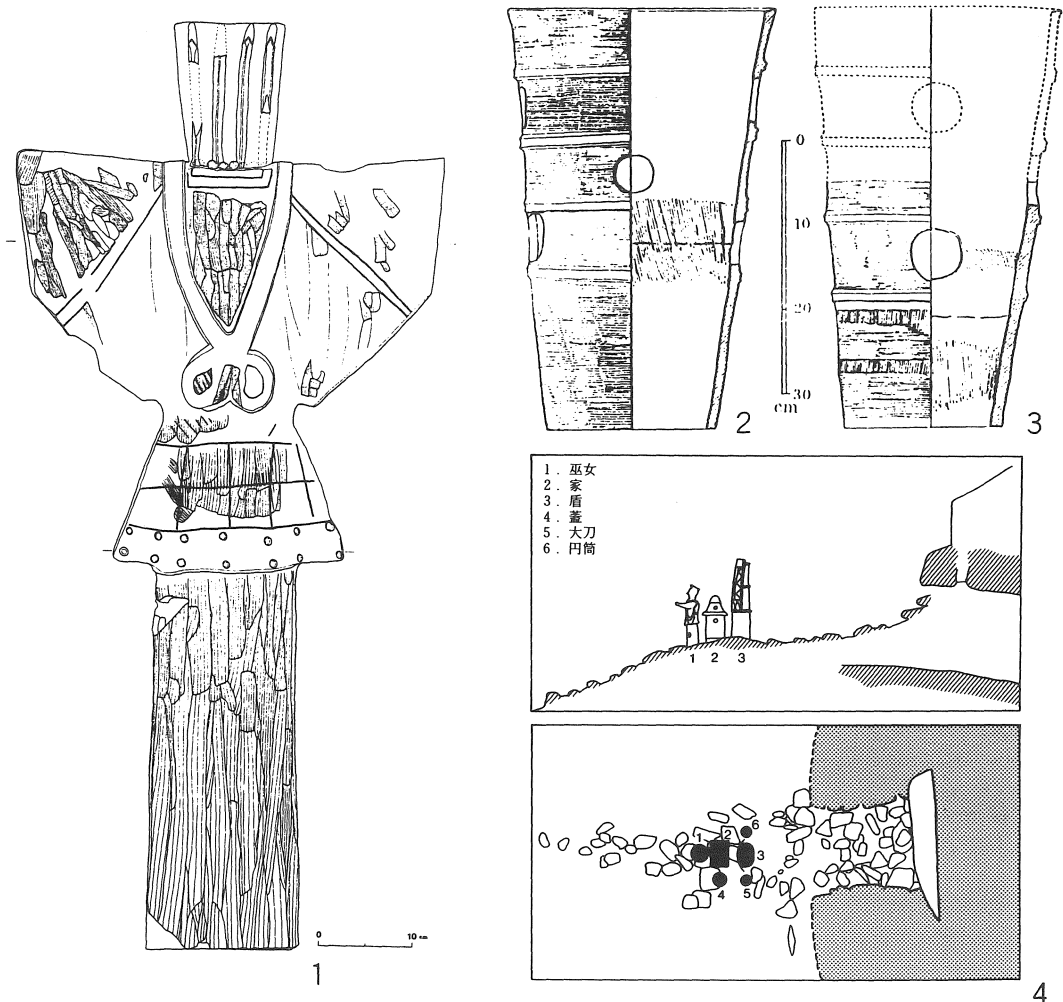
以上の検討からすれば、箱谷3号墳の時期は土器群から見ると、6世紀後半とせざるをえず、埴輪の製作年代も河内氏の見解よりも新しいものと思われる。このことは報告書でも指摘されているように、埴輪を持つ古墳としては、紀伊でも最も後出のもの1例と確認してよいことになろう。

箱谷3号墳の円筒埴輪は川西編年Ⅴ期でも後半の資料として位置付けが可能となるわけであるが、第2次調整としてのヨコハケの残存は異例であり、極めて保守的な内容を示していることは注目に値する。Ⅴ期におけるヨコハケの残存に付いては、天野末喜・松村隆文両氏が既に明らかにしている（註12）ように、Ⅴ期前半の段階では岡ミサンザイ古墳などに一定の割合で認められるほか、「紀伊ではMT15・TK10の須恵器を伴う後半の段階でもヨコハケを遺存する円筒埴輪の存在が認められており、滋賀県の一部にも同様の現象が見られる。」ので、箱谷3号墳だけの例外ではなく、紀伊における地域性として認識しようである。筆者は、こうした例がTK43段階まで存続していたことを紀伊における埴輪の地域性として重視してみたい。

#### (4) 形象埴輪の特徴

筆者が注目するもう一点は、形象埴輪である。第3図1に実測図を掲げた靱形埴輪は復原高76cm、最大幅33cmを測る。円筒の上部に粘土板を接合して方立とし、左右の側面にも粘土板を貼り付けて鱗とする。円筒の上面は筒抜けになっている。方立にはヘラ描きで5本の鉄鏃を表現し、その左右と下側に凸帯を貼り付けている。また、鱗の下端部にも凸帯がみられる。この鱗と方立の周縁部にはヘラ描きで斜格子文が施文され、部分的に赤色彩色が残存する。この時期の靱形埴輪は近畿地方では稀で、和歌山県下でも唯一の資料である。関東地方で6世紀代に盛んに製作された奴舩形の靱形埴輪との類似性に着目したい。鱗部が1枚の粘土板で製作されており、側面が内湾する点が上下2段の鱗を取りつける関東地方の靱型埴輪（第4図1）との相違点であるが、関東地方の靱型埴輪を模倣して製作された可能性は考えてもよいように思われる。近年、京都府宇治市兎道門ノ前古墳からの奴舩形の靱型埴輪出土が報じられ（註13）、TK43型式の須恵器を伴っているので、同時期に、関東地方の影響が紀伊だけでなく、畿内にも及んだことが推測される。

家形埴輪（写真1）は近畿地方では少数派の寄棟造りで、壁立ちが極めて低く、屋根が高く作られている。高さは43cmある。棟の妻側には上縁が丸みを帯びる破風板が表現され、中心部に小さ



第4図 参考資料（名報告書・図録より転載）

- 1 酒巻15号墳出土靱形埴輪    2・3 鳴滝2号墳西方古墳出土の紀伊型埴輪  
 4 勢野茶臼山古墳形象埴輪配列復元図

な煙出しの穴が開けられている。また、棟は上部を閉塞しておらず、開放構造になっていて、そこに長さ19cmの中実製作の堅魚木（写真2）が載る。堅魚木は2点が残っている。この家形埴輪も関東地方の寄棟家との類似性が注目される。屋根を高く表現し、棟を閉じずに、堅魚木を載せるという型式は近畿地方には例が少なく、埼玉県月輪古墳群第12号墳（写真3）や東京都四つ葉遺跡第1号墳ほか多数の実例があるので、関東地方の家形埴輪を模倣した可能性は高いように思われる。

なお、形象埴輪の配列方法については、石室開口部の墓道に鞍、人物、家が1列縦隊で、設置されていた可能性が推定される。このことは、奈良県勢野茶臼山古墳で、羨道部に盾、女子、蓋、家が1列に設置されていて（第4図2）、大和における埴輪消滅期の特殊な配列法とされたのと共通しており、留意されるところである。

#### （5）紀伊型埴輪の設定

河内一浩氏は和歌山市岡崎にある6世紀代に採集された森小手穂埴輪窯跡群で表面採集された資

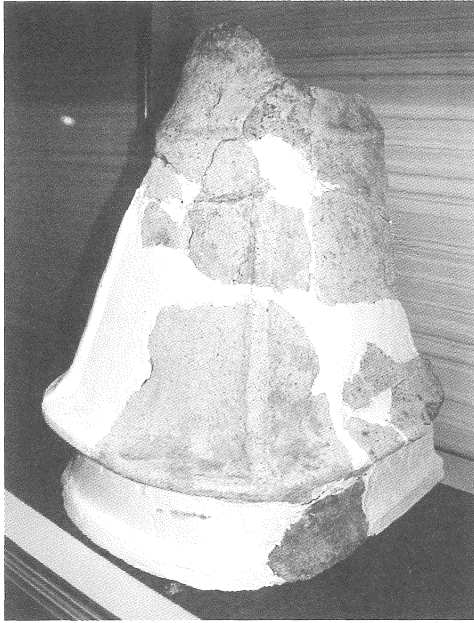


写真1  
箱谷3号墳出土  
土家形埴輪

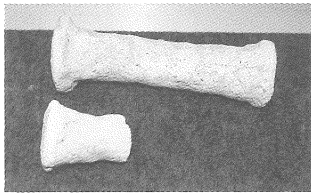
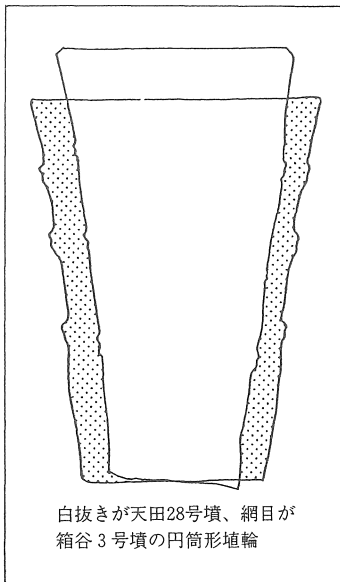


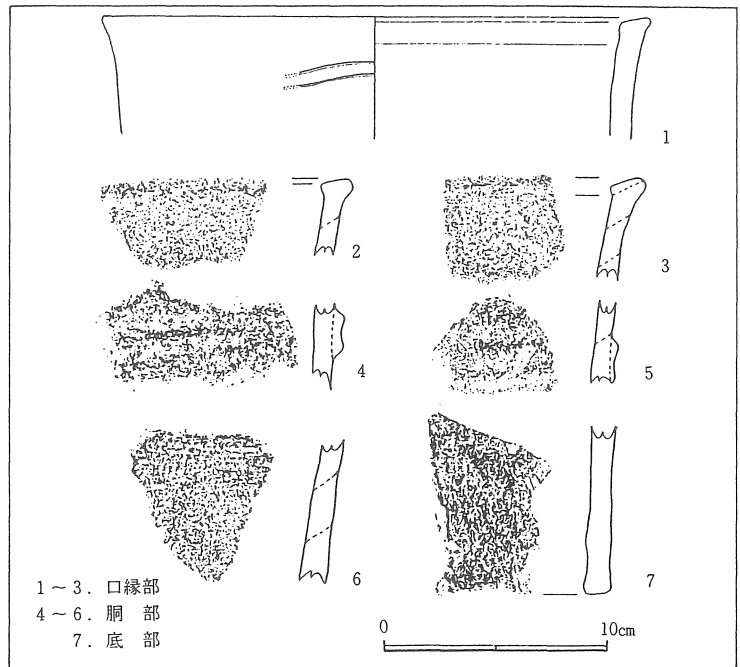
写真2 箱谷3号墳出土土堅魚木



写真3 月輪12号墳出土土家形埴輪(月輪遺跡群調査会提供)



第5図 円筒埴輪形態比較図



第6図 森小手穂埴輪窯址採集埴輪実測図(註9文献より転載)

料（第6図）が、第2次調整にヨコハケを用い、口縁端部が外側に肥厚する形状を持つことから、箱谷3号墳の円筒埴輪との間に強い共通性（註14）を指摘した。また、類例が県下の8基の古墳に認められ、県外に類似資料のないことから、この一群を「紀伊型」と呼ぶことを提唱された（註15）。その内訳は鳴滝2号墳、花山6号墳、大谷山27号墳、山崎山12号墳、万葉植物園内小古墳、楠3号墳、三味塚4号墳、箱谷3号墳と森小手穂窯であるが、時期を限定できるものを取上げると、花山6号墳、大谷山27号墳、山崎山12号墳があり、各古墳から出土した須恵器は6世紀前半代を示すことから、この紀伊型埴輪の成立を一応6世紀前半代として捉えることができるという。

供給関係については、森小手穂窯では紀伊型の埴輪を生産していることが分かったが、森小手穂窯の埴輪の胎土には多量の片岩が含まれているにもかかわらず、箱谷3号墳と三味塚4号墳の2例は片岩を含んでいないことから、森小手穂窯の製品とは考えられず、同一の工人集団が移動生産したものと推定した。河内氏はこれを「移動型」と呼んでいる。少し、補足説明すると、8基の内、6基は森小手穂窯に隣接する和歌山市内と市域に接する海南市の山崎山古墳群にあるが、三味塚4号墳は紀ノ川の20km上流に位置する打田町にあり、箱谷3号墳は直線距離で40kmの川辺町にある。したがって、直接供給圏はあまり広くなく、遠隔地には工人集団が出かけて行って、埴輪窯を築いて、そこで埴輪を生産したということになる。

## 2 御坊市天田28号墳の例

### (1) 古墳の概要

天田28号墳は日高川の河口付近の丘陵上に占地する前方後円墳で、27基の円墳とともに天田古墳群を構成している。墳丘主軸長は30mで、主体部は長さ4.65mの竪穴式石室であった。

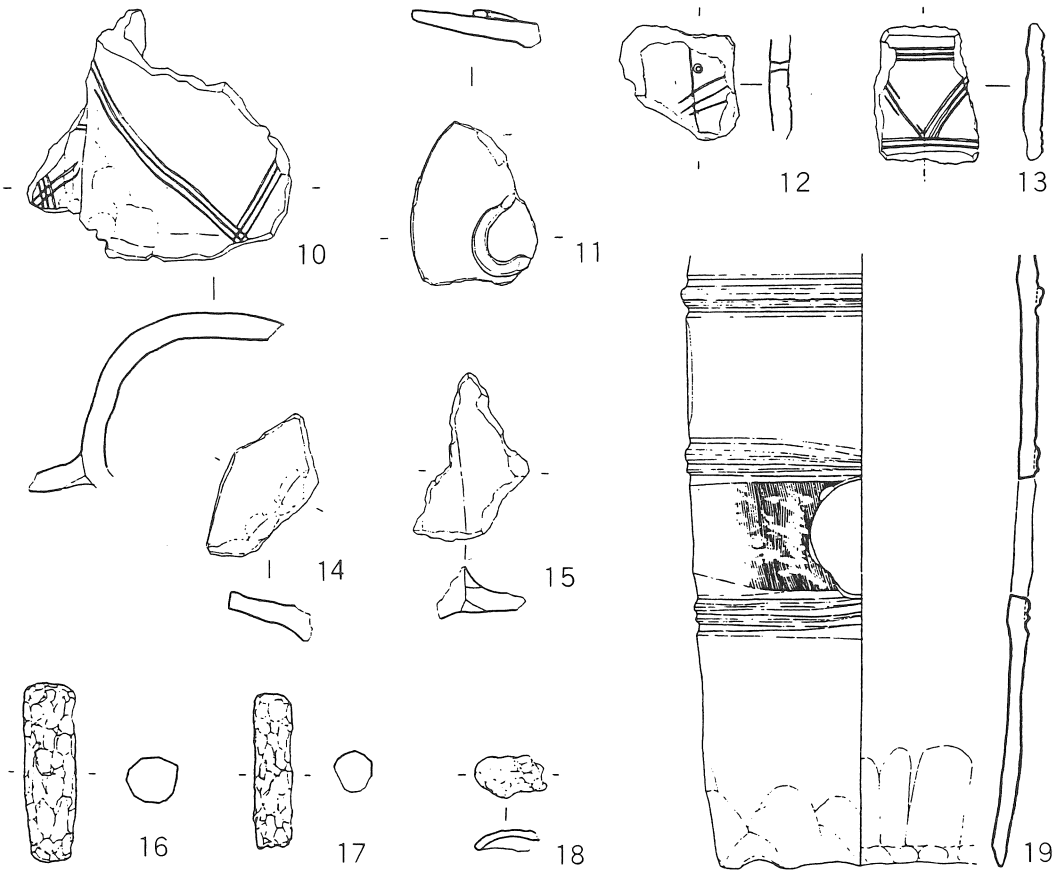
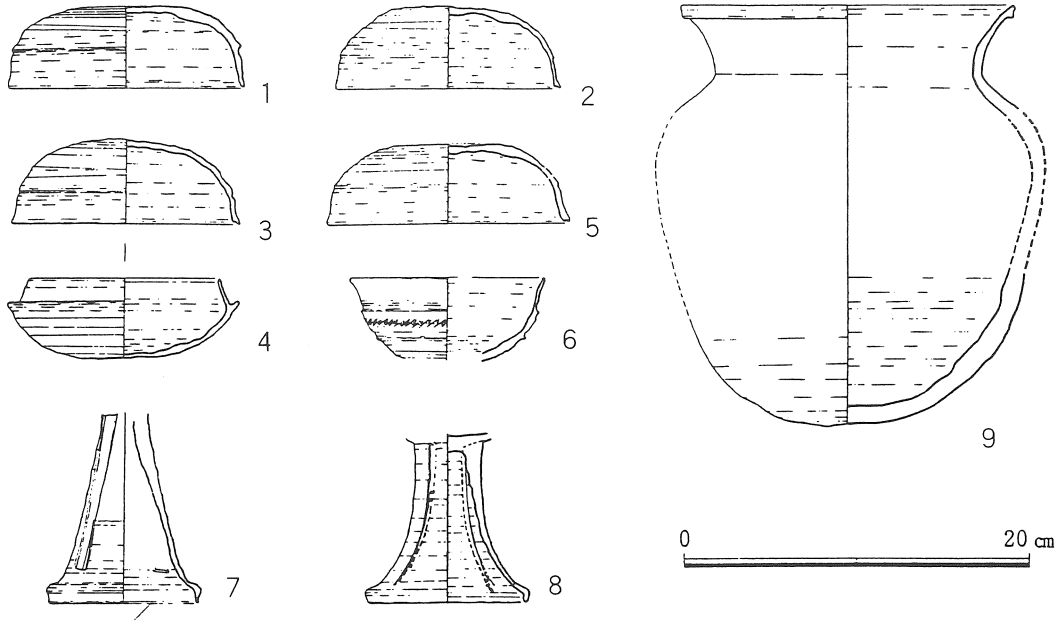
副葬品には鋤先、鑿、鎌、斧、矛、鉄族、轡、留金具、尾錠、須恵器蓋杯がある。墳丘からは埴輪片と須恵器杯が出土している。くびれ部では原位置に樹立された状態で、円筒埴輪が検出され、他は墳丘各所に散乱する状態であった。また、北側くびれ部から前方部にかけての墳丘裾部からは人物、家、器財などの形象埴輪が出土した。発掘調査による和歌山県での埴輪の南限である。

報告者は、天田古墳群中、確認されている唯一の前方後円墳で、立地もよく、盗掘を受けていたにもかかわらず、内容豊かな副葬品がみられることから、被葬者はこの地に墓域を定め、天田古墳群を造営した集団の長で、大和政権下において軍事面で活躍し、その見返りとして相当な地位と職を獲得し、前方後円墳を築造したと想定している（註16）。

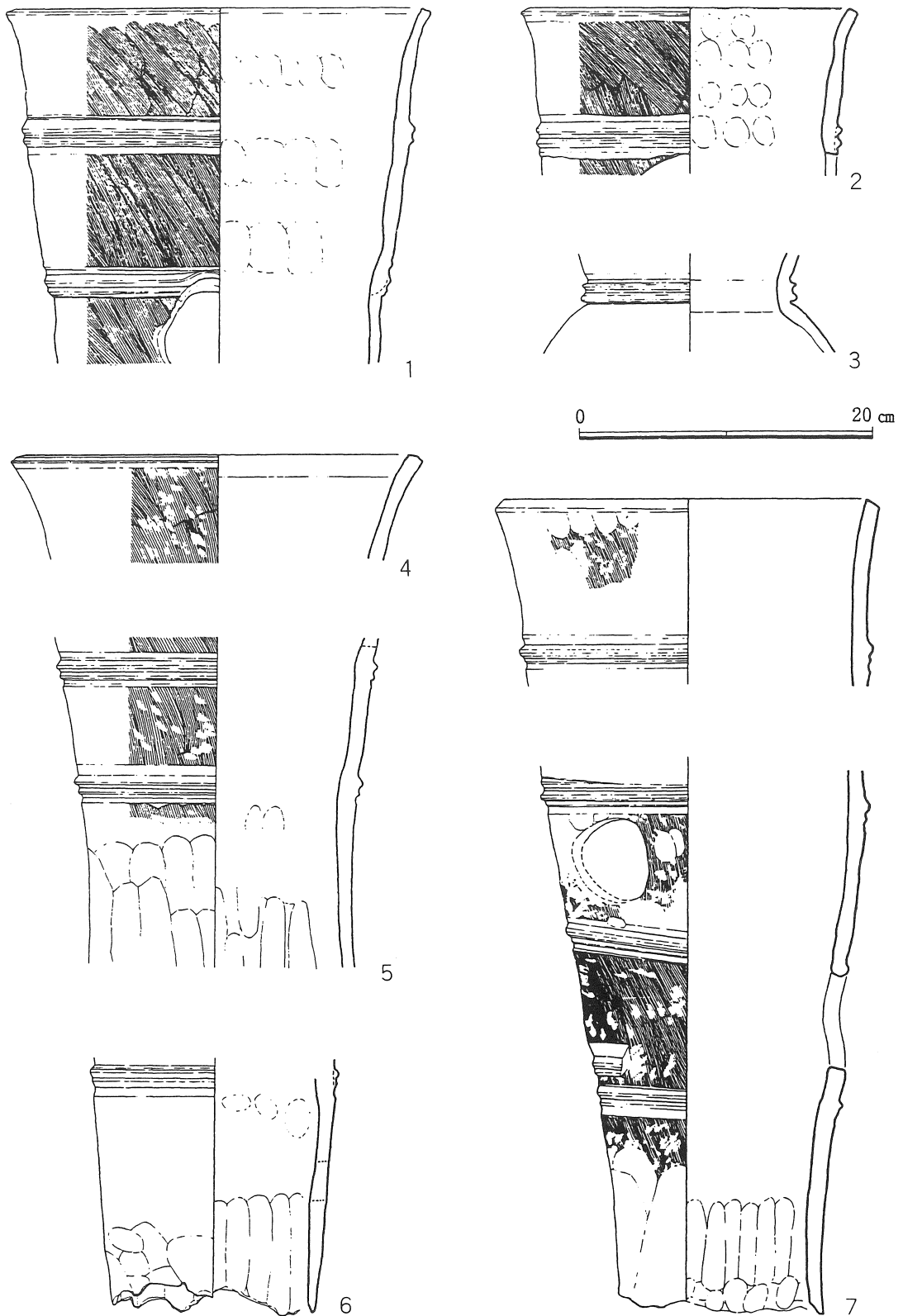
### (2) 円筒埴輪の特徴

円筒埴輪（第7・8図）には完形品はないが、3条凸帯4段構成とみられ、底部径14～16.8cm、口径24～29.2cm、復元高44cm前後である。器形は細身（第5図参照）で、寸胴気味のもの、口縁部に向かって開くものがある。口縁部はわずかに外反して開くが、端部は四角く収められており、肥厚するものはない。外面調整は左上がりのナナメハケで、2次調整は伴わない。内面調整は縦位のユビナデである。透孔は円形で、第2段と第3段に直交して穿たれている。底部の残存する資料には、いずれも外面板押圧による底部調整が顕著に認められ、底部断面が薄く尖る。凸帯は断面がM字状を呈し、突出度が低く、調整が粗雑である。

胎土には片岩を含み、色調は乳褐色を呈し、焼成は良好で、半須恵質の製品を含む。



第7図 天田28号墳出土土須恵器・埴輪実測図（註16文献より転載）



第8図 天田28号墳出土埴輪実測図（註16文献より転載）



### (3) 埴輪の製作時期

宍窯焼成品で、2次調整を欠き、底部調整を伴うことから、川西編年Ⅴ期でも後半期と考えられる。報告者は須恵器の年代も勘案して6世紀前半代でも後葉に比定している。同じく底部調整を伴う白浜町権現平古墳出土資料と比較すると、凸帯の突出度が低く、調整も粗雑であることから、後出するものとみられる。

須恵器（第7図）は蓋坏、無蓋高坏とも陶邑編年Ⅱ形式1段階の資料に類似するが、杯蓋の段が第7図1を除くと、不明瞭であり、端部が外反する特徴からみてもⅡ形式2段階への過渡期に位置づけられるものと思われる。したがって、円筒埴輪の製作時期は6世紀初頭までは遡らず、6世紀前半の中頃に比定されよう。

### (4) 形象埴輪の特徴

形象破片は部分破片しか出土しなかった。報告者は第7図10を人物の胴部、11を女子の髻とみるが、前者は鱗部を伴っており、器財埴輪となろう。後者は端部に丸みがあり、分銅形で板作りの髻となる可能性がある。12・13・15は石見型盾とみてよいであろう。12には小穿孔も認められる。14は家とされているが、判断が難しい。16と17は家形埴輪の千木とされるが、堅魚木となる可能性が高い。11が女子の髻でよいならば、板状である点で、中空製作の白浜町権現平古墳のものより後出的である。

### (5) 畿内型埴輪の設定

河内一浩氏は箱谷3号墳と天田28号墳の埴輪を比較して、「時期差がさほどないにもかかわらず、形態や技法に大きな違いを有している」とし、「形態においては、ずん胴な感じのする箱谷3号墳に比べ、天田28号墳では、器高が高くすらりとした感じを与え」（第5図参照）また、「技法においては天田28号墳は非常に乱雑で、突帯の張り付けやハケメの調整に粗雑感がある。それに対し箱谷3号墳では、二次調整にヨコハケを施し、内面においてもハケメにより調整を施し、成形による凸凹を丁寧に調整している。」ことから、「同時期の所産である両者の埴輪における違いは全く違った工人集団の製品である可能性が高い」と判断した（註17）。

しかし、両者が同時期であるという前提は、本稿で述べるように、正しくはなく、かなりの時間差があると筆者は考える。けれども、主に口縁部の形状の差異に着目して、天田28号墳例を「畿内型」と呼び、和歌山県外でも多くみられる類型としたことは、おそらく誤りないであろう。河内氏は同型の埴輪として和歌山県下では有田市一本松古墳・和歌山市北田井遺跡・井辺八幡山古墳・雨が谷3号墳・花山2号墳・大谷山22号墳・大日山35号墳・貴志川町平池1号墳・三味塚古墳・岩出町船戸箱山古墳などを挙げている。また、天田28号墳の埴輪の胎土には、報告者の久貝健氏が「有田川以北の緑泥片岩が含まれものがあり、紀北でつくられ搬入されたものである。」と指摘したとおり、和歌山市内に存在している2箇所の埴輪生産遺跡の内、砂羅谷窯跡の製品が河内氏の述べる畿内型の部類に入り、片岩を含むとすれば、そこから、遠隔地である天田28号墳に埴輪供給が行われたことも十分推定しうる。

## 3 西牟婁郡白浜町権現平古墳の例

### (1) 古墳の概要

権現平古墳は白浜町才野にある造出し付きの直径22mを測る円墳で、隣接する7基の小円墳を合せて権現平古墳群を形成している。昭和6年に地元民によって調査され、主体部である箱式石棺から直刀3点と鉄鏃20点が出土したという。葺石を施設した2段築成の古墳である。

## (2) 円筒埴輪の特徴

田辺市歴史資料館に保管されている埴輪を藤薮勝則氏が資料紹介されている（註18）ので、実測図の引用と、報文の要約をさせていただく。完形品はないが、第9図2では凸帯を挟んだ上下の段に透穴が直交して穿孔されているので、第2・3段に透孔のある3条凸帯4段構成の円筒埴輪となる可能性が高い。第1段の残存する個体が多いが、底径は10.3～14.7cmしかなく、小型の円筒埴輪である。底部が厚く、低部調整を伴わないもの（第9図5・6）と底部が薄く、外面板押圧の底部調整を持つもの（第9図4）とがある。第9図3は底部が厚いが、内外面とも板ナデが加えられており、ケズりに類する底部調整の可能性がある。

いずれの個体も調整手法は、外面が左上りのナナメハケ、内面はユビナデである。凸帯は断面台形状を呈し、断続ナデ技法はみられない。第9図1の口縁部は復原口径が31cmあり、底部とは釣り合いの取れない大型品である。直線的に開く直口縁であるが、口縁部の高さが第1段に比して短いことが着目される。透孔は円形に限られるようである。色調は淡褐色ないし淡赤褐色を呈し、黒斑はない。胎土には石英・長石・チャートなどを含むが、片岩は認められていない。

藤薮氏は底部調整を持たない個体は朝顔形円筒埴輪の可能性があると指摘している。朝顔形円筒埴輪は細片であるが、復原実測すると、口縁部（第9図7）は外反して大きく開き、復原口径は31cmとなる。肩部（第9図8）は丸みがなく、撫肩状である。

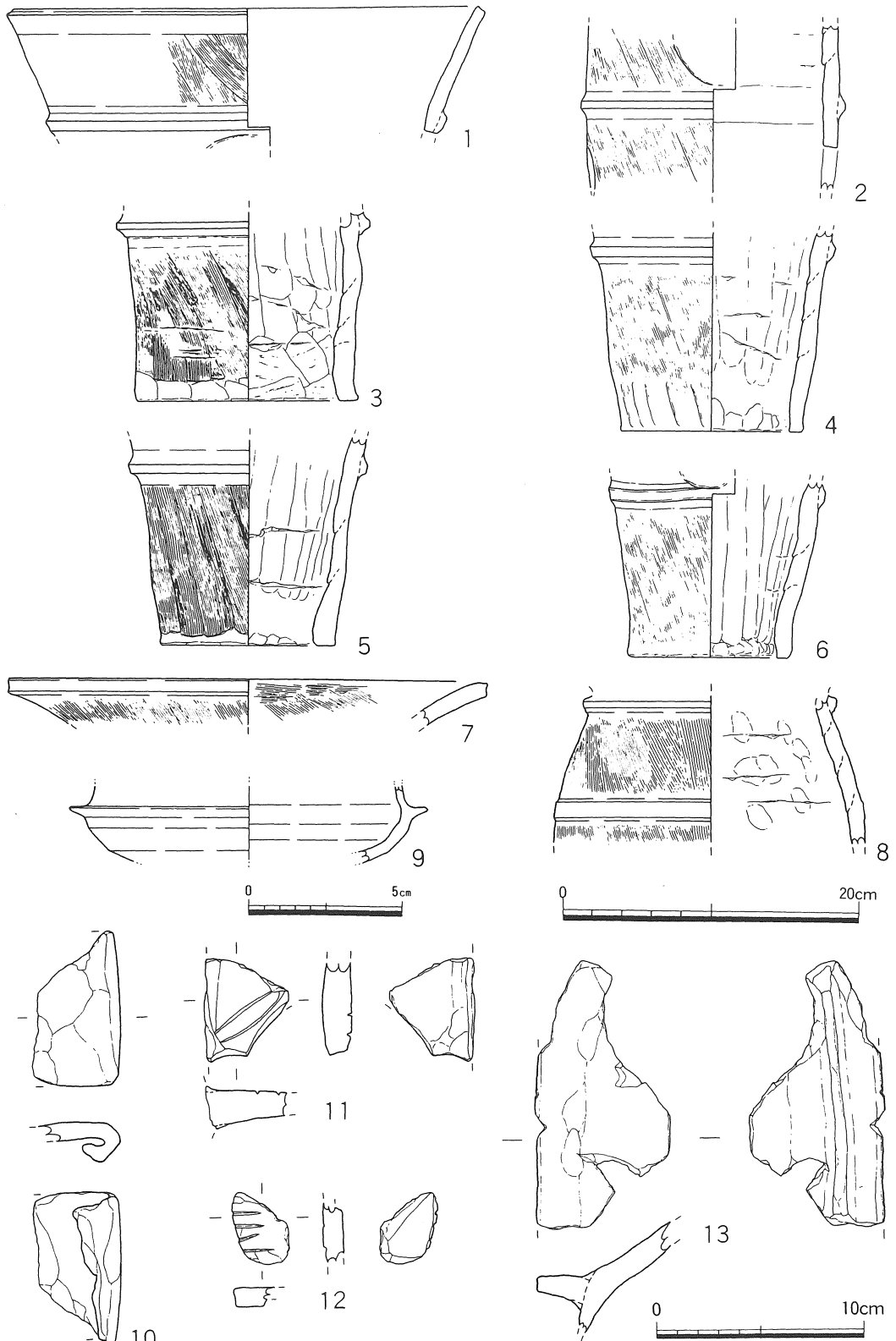
## (3) 埴輪の製作時期

円筒埴輪は外面調整が第1次調整のナナメハケのみで、無黒斑の、川西編年V期に相当し、底部調整を伴うことから、その後半期に属する可能性が高い。これらの特徴から藤薮氏は権現平古墳の埴輪を6世紀前半でも後葉に比定できるものとしている。その根拠の一つとしてと盗掘孔北肩表面採集の須恵器杯身（第9図9）がTK10～43型式併行であり、6世紀中頃に比定できることと矛盾しないとした上で、御坊市天田28号墳とともに和歌山県内における埴輪製作の下限を示す資料とした。

後に、藤薮氏はこの須恵器をMT15型式併行と改めたが、埴輪の年代観は変更していない。須恵器は実測図から見る限り、底体部が浅く、立上りが内傾し、受部がやや長い特徴から中村編年のⅡ型式1段階ないし2段階として良いと思われる。また、円筒埴輪の凸帯は断面台形状を呈し、突出度が低くないことから、断面M字状で突出度の低い凸帯を持つ天田28号墳より先行する可能性が高い。これは和歌山市雨が谷3号墳とほぼ同時期となり、紀伊における底部調整の比較的早い時期の資料となる。

## (4) 形象埴輪

形象埴輪には第9図11の沈線装飾のある蓋形埴輪の立ち飾り部、10の女子髻部、13の盾などがあ。このうち、女子の髻は端部を内側に折り曲げて丸みを持たせた中空製作品であり、古い特徴を示している。また、古墳時代中期的な蓋が残存していることも、前述した円筒埴輪の年代観と符合



10  
 第9図 権現平1号墳出土埴輪・須恵器実測図 (註18文献より転載)

するものとみられよう。

#### (5) 埴輪の供給

円筒埴輪の法量や調整技法などに統一性があることから、藤薮氏は規格化された埴輪生産を推察でき、さらに胎土に結晶片岩を含まないことから古墳周辺での埴輪生産を指摘できるとする。妥当な見解であろう。権現平古墳の円筒埴輪は河内一浩氏の言う畿内型と考えられるが、供給は移動型の1例となる。したがって、畿内型埴輪も一元供給オンリーではなかったことになる。

### 4 有田郡湯浅町天神山古墳の例

#### (1) 古墳の概要

天神山古墳はJR湯浅駅東北にある独立丘陵上にあった大規模な円墳で、現在は市街化によって、失われたが、直径30m、3段築成の、紀中地方では最大級の大型円墳であったと推定されている。主体部は緑泥片岩を用いた大小2基の箱式石棺であったらしい。

副葬品は現在、行方不明であるが、勾玉、管玉、小玉、直刀、金環、銅釦などがあったと伝えられている（註19）。

#### (2) 円筒埴輪の特徴

3段分が残り、口径28cm、残存高34.2cmを測る半完形品（写真4）と4点の破片（写真5）を取り上げる。前者は上から2・3段目に円形透孔があるので、3条凸帯4段構成の円筒埴輪となる可能性が高い。外面はナナメハケ調整で、2次調整のヨコハケは伴わない。内面調整はユビナデである。口縁部直下に凸帯を持っている点は紀伊では異例であり、中期の古市・百舌鳥などの古墳群に見られた貼り付け口縁を持つ円筒埴輪の退化形態の可能性もある。また、底部破片（写真5左）には、外面板押圧の底部調整を伴っている。凸帯の特徴は写真4では断面低台形を呈し、幅が広く、突出度は低い。破片資料の場合、断面形は台形で突出度はやや高い。他に、底径26cm、残存高20cmを測り、外面に板押圧の底部調整を伴う第1段、底径26cm、残存高19cmを測り、第1段に円形透孔を伴うため形象埴輪台部と考えられる個体がある。

#### (3) 形象埴輪の特徴

形象埴輪については巽三郎氏の報告（註20）があり、和歌山県史にも掲載されているので参考となるが、筆者も2回にわたって実見させて頂き、写真掲載を許可されたので、新たな知見を加味した上で、改めて、その概要を紹介しておきたい。

写真6は人物埴輪の左腕部である。現存長16cm、最大径6.8cmを測り、中空製作である。手首には2本の釦を付けており、外側のものには刻み目の表現がある。写真9は巽報告では人物の右足下腿部とされていたが、中空製作の大刀形埴輪の柄部であり、交差する革紐巻の表現がある。これに接合する柄頭（写真10）は台形状の粘土板で外面にX形の複線内に刺突文を加えた文様があり、側縁部にも複線内に刺突を加えた連続三角文がある。法量は柄の残存長20cm、柄頭の幅10cm、現存長12cmである。写真7は大刀形埴輪勾金部の破片で、左側の破片は残存長14cm、幅7cmを測る。表面の両縁は複線に刺突文を加え、中央には2個の半球形の粘土を貼り付け、金銅製飾金具を表現し、さらにその間を複線で区切っている。側面（写真8）には斜行する刻み目があり、赤色彩色が残存している。巽氏の報告には、勾金から剥離した立体的な三輪玉があったが、今回は実

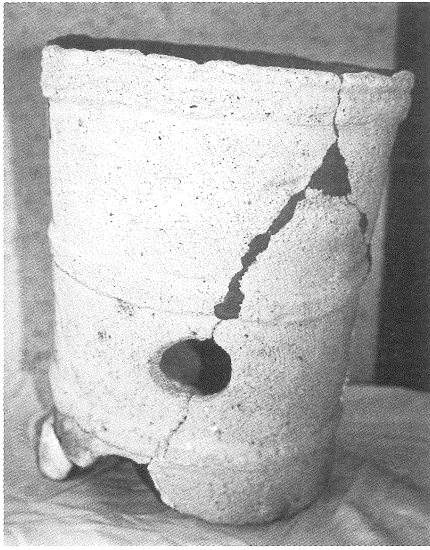


写真4 B類円筒埴輪



写真5 A類円筒埴輪

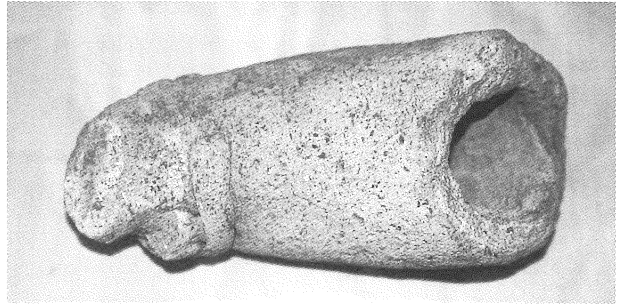


写真6 人物埴輪左腕部

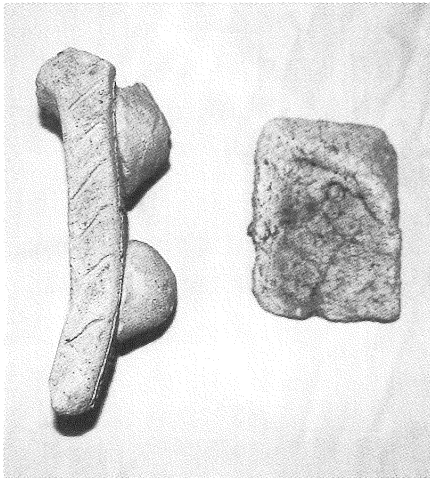


写真8 大刀形埴輪勾金部(側面)

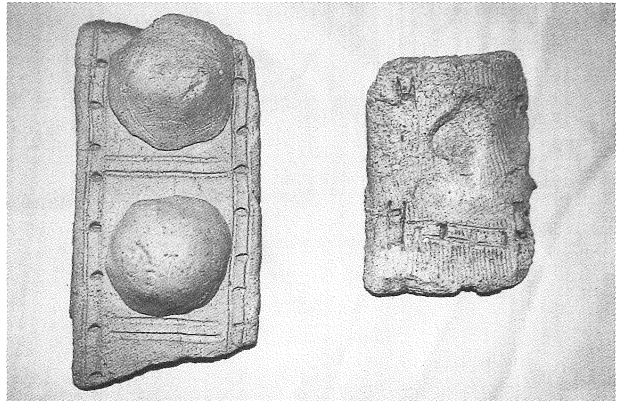


写真7 大刀形埴輪勾金部(正面)

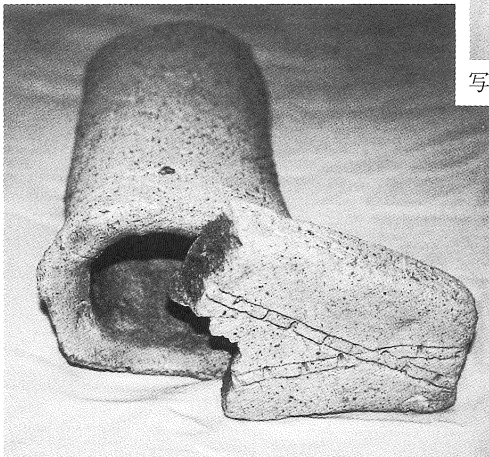


写真10 大刀形埴輪柄頭部

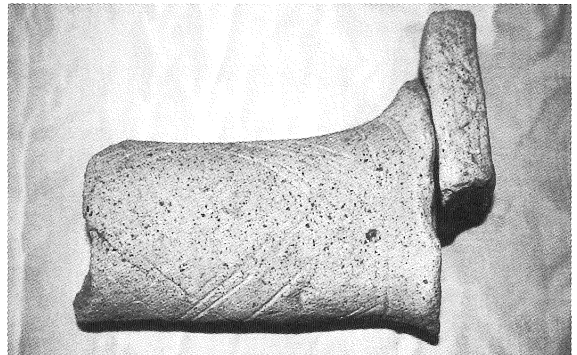


写真9 大刀形埴輪柄部



写真11 蓋形埴輪笠部

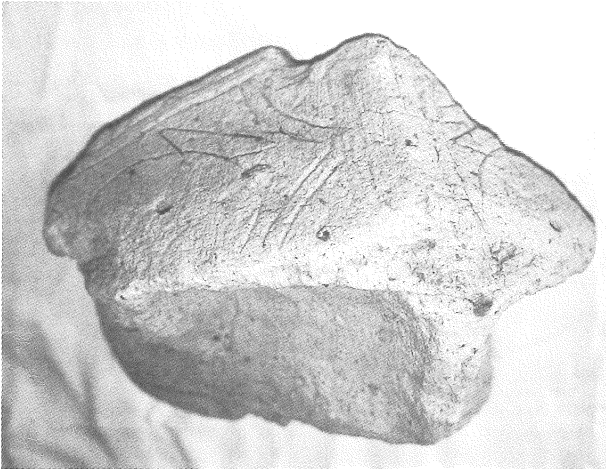


写真15 家形埴輪軒部

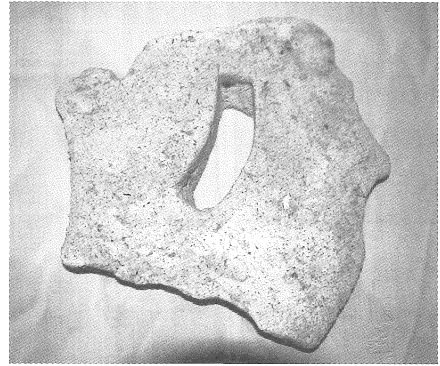


写真12 蓋形埴輪立飾り部 1

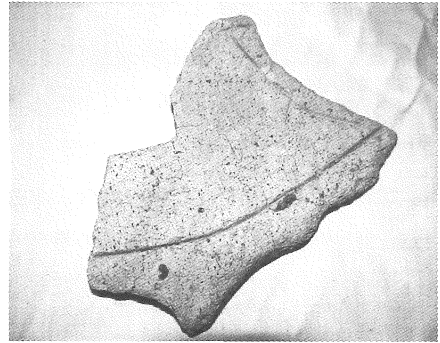


写真13 蓋形埴輪立飾り部 2

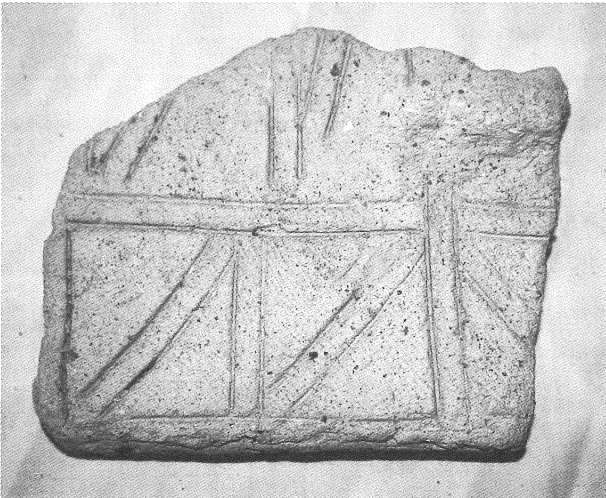


写真16 家形埴輪壁体部

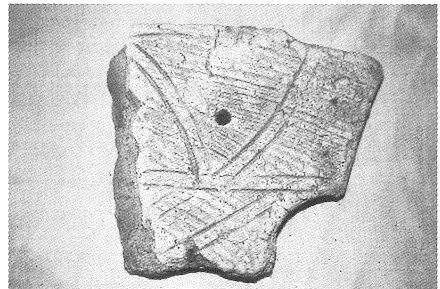


写真14 石見型盾形埴輪▶

見できなかった。

写真11は蓋形埴輪の笠部で、直径46cm、残存高21cm、円筒部下端の残存径22cmを測る。笠端部には幅の広い凸帯がめぐり、その内側には、複線の区画線が中心部から放射状に引かれている。台部は底部に向かってすぼまっている。写真12と13は蓋の立飾り部で、鱗飾り状の屈曲した形態を示し、透孔と線刻文様を伴っている。現存幅はそれぞれ20.5cm、12cmである。写真14は側縁部が屈曲し、表面に複線の直弧文と小穿孔があり、石見型盾の可能性が考えられた。

写真15は家形埴輪の屋根隅から軒の部分で、幅20cm、奥行き12cm、高さは18cmある。

直弧文と月日貝の線刻で埋め尽くされ、小穿孔を伴う。写真16は方形の窓の一部が残り、網代を表現する線刻のある家形埴輪壁体部で、現存幅15cm、現存高12cmを測る。巽氏の報告では無文で軒先に凸帯を伴う家形埴輪の屋根隅部があったが、今回は実見できなかった。

#### (4) 埴輪の製作年代

前述したとおり、円筒埴輪の特徴として、外面調整がナナメハケで2次調整を欠き、底部調整を伴う個体が見られたことから、川西編年V期後半に属する可能性がある。和歌山市大谷古墳もナナメハケ調整が主体的で2次調整を欠くV期の例であり、対比すると、大谷古墳例は4条凸帯で器高46cm～51.5cm、口径26～31cmを測り、法量的には天神山古墳例との差は小さいものと推定される。凸帯は両者とも断面形が台形で、突出度が高いものから低いものまで含んでいる。また、大谷古墳からは1983年の調査で外面板押圧の底部調整を伴う資料が検出されている（註21）。

ところで、天神山古墳の口縁部直下に凸帯を持つ円筒埴輪は坂本和俊氏がB類円筒埴輪とするもので、端部から凸帯1条分ほど離して凸帯を貼ってあり、その形状が他の凸帯と変わらないII a類に相当する（註22）。坂本氏はB類円筒埴輪が器台であり、口縁部に蓋がはめ込まれる場合の多かったことを立証している。天神山古墳の場合も、蓋とB類円筒埴輪は組合わされていた可能性が高いであろう。

川西編年V期のB類円筒埴輪には、近畿地方では大阪府藤井寺市岡ミサンザイ古墳、豊中市新免3号墳、堺市日置荘埴輪窯址、関東地方では群馬県藤岡市七輿山古墳、栃木県佐野市唐沢山埴輪窯址などがある。坂本氏はTK23型式併行期の岡ミサンザイ古墳B類にいずれもB種ヨコハケが認められるのに対して、A類の場合、ヨコハケが残存する率が極めて低いことを例示して、B類円筒埴輪には連綿として器台としての機能を保持しつづけたことに象徴されるように、A類円筒埴輪より古い特徴を残すことを示していると説く。このように保守的な性格の強いB類円筒埴輪の場合、MT15型式併行期でも峯ヶ塚古墳のようにヨコハケが認められる場合があり、同時期の紀伊型埴輪にヨコハケが残ることと共通する現象となることは十分注目しておく必要がある。

つぎに、蓋形埴輪に付いてその編年の位置付けを検討してみたい。まず、淡輪技法で知られ川西編年IV期に位置づけられている車駕之古址古墳の蓋（第11図5）は笠端部に幅の広い凸帯を持ち、放射状の線刻を伴うことから天神山古墳例と共通する。台部が底部に向かってすぼまる形状も類似している。ところが、井辺八幡山古墳の蓋（第11図9）には笠部に凸帯と線刻が認められない。また、破片資料ではあるが、大谷古墳の場合、笠端部（第11図7）に凸帯はなく、沈線が巡っている。有黒斑の円筒埴輪を伴い5世紀初頭前後の時期が推定されている六十谷2号墳の蓋も笠端部に

凸帯を持たず、沈線の巡る型式なので、大谷古墳は六十谷2号墳の系譜を引くものと考えうる。このことから、蓋の笠端部に沈線の巡る型式と凸帯を貼る型式とが5世紀代に共存するが、6世紀に入ると凸帯・沈線とも消失するという変遷を推定することができる。立ち飾りを比較すると、車駕之古址古墳の蓋では長方形の透孔を穿っていて、天神山古墳と共通するが、井辺八幡山古墳の蓋には透孔が認められない。大谷古墳の場合、小破片しかなく、透孔の有無は確認できない。

以上の比較検討からすると、天神山古墳の蓋は車駕之古址古墳の蓋との共通性が高いことと、井辺八幡山古墳の蓋より古いことが判明する。また、六十谷2号墳の系譜を引く大谷古墳の蓋とは別系統のものであり、蓋の型式によって新旧を論じることが難しいことを確認しうる。

したがって、天神山古墳はMT15型式併行の井辺八幡山古墳より古く、大谷古墳と近接する時期が想定される。天神山古墳からは須恵器が出土していないが、TK47型式併行期となる可能性が高いであろう。そのように考える理由は、紀伊における人物埴輪の出現期が今の所、花山45号墳・北田井古墳の両例から該期と考えられること、底部調整技法の古い例は雨が谷3号墳のMT15併行期であり、天神山古墳をそれよりも古く位置づけるとしても、連続する時期と見ることが妥当であることによっている。

なお、大谷古墳からは人物埴輪が出土していないが、発掘調査面積が狭いので、これを伴っていないとは断言できない。多くの副葬品の内、馬冑の型式を重視すると5世紀第4四半期とされている玉田28号墳・M3号墳例との類似性が高く、副葬品の組み合わせに埼玉県行田市稲荷山古墳との共通性が高いことから、TK47もしくはTK23型式併行となろう。

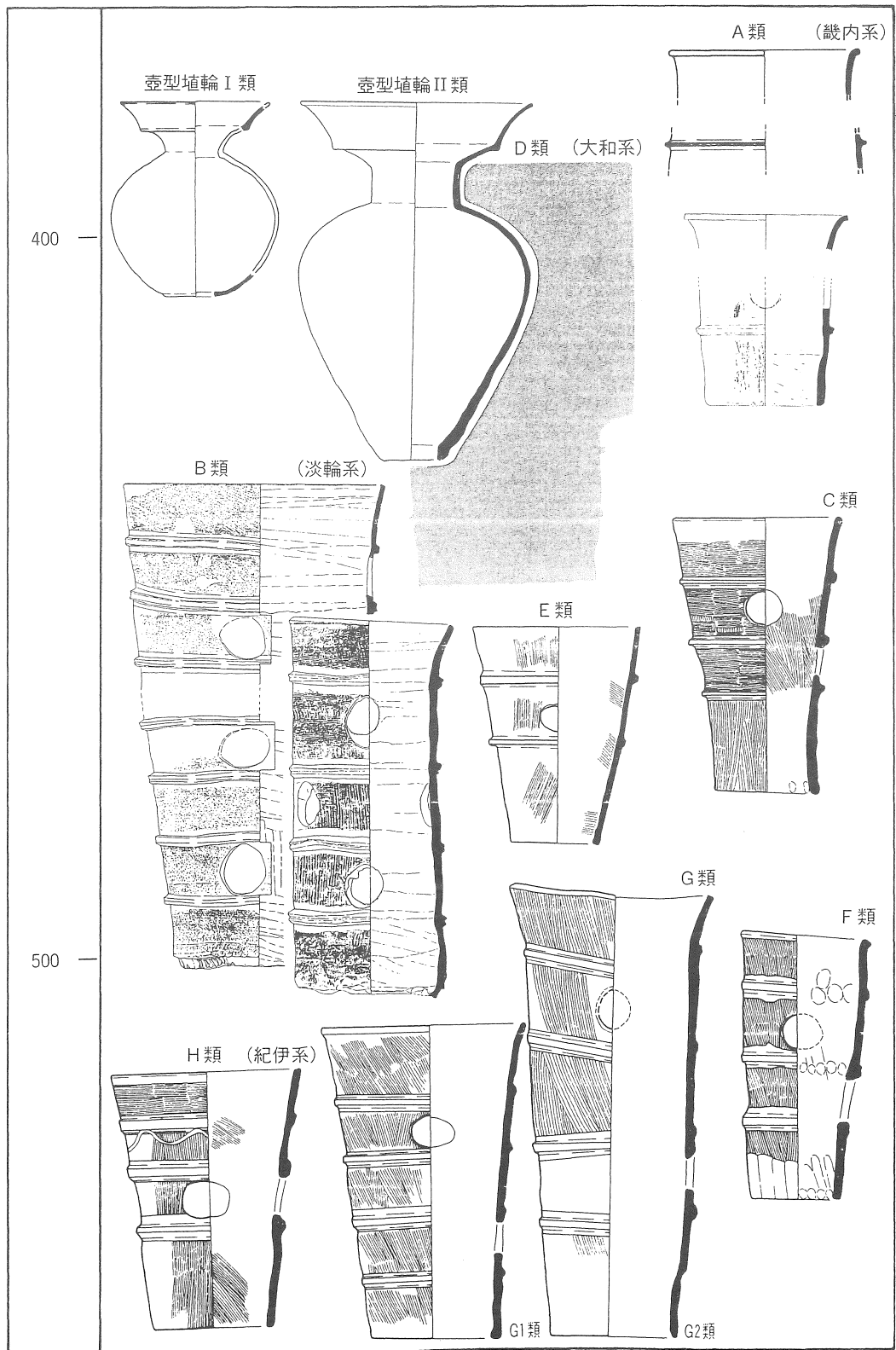
#### IV 紀伊の埴輪の地域性

前章では、和歌山県南部の埴輪稀少地域における資料の実態を検討し、地元研究者による先行研究の成果を紹介しながら、埴輪の供給形態や、地域性の問題にも触れてきたところであるが、紀北も含めた紀伊全体では、いったい、いつ埴輪が導入され、どのような埴輪が製作され、時代ごとにどのような展開を遂げ、終焉時期はいつであったのか。全体の展望の中から、紀伊の埴輪の地域性を炙り出すためのささやかな検討を行ってみたい。

##### 1 紀伊における埴輪の導入

和歌山県における最古の埴輪は、正規の発掘調査で検出され、報告済みのものに和歌山市六十谷古墳群の第2号墳（註23）と和歌山市晒山1号墳（註24）の資料がある。前者は全長27mの前方後円墳であるが、崩壊して主体部は現存していなかった。後者は直径25mの円墳で、粘土槨を主体部に持つ。円筒埴輪（第10図右側上から3・4番目）の特徴は六十谷第2号墳の場合、底部径20cm前後の小型円筒埴輪で、体部は直立するが、口縁部は外反して開く。黒斑が認められ、野窯焼成である。外面調整は細かなタテハケが主体的で、ごく少数ナデ調整のものがあるが、すべてに第2次調整は認められない。凸帯は断面形が台形をなすものが多く、透孔は円形のみである。報告者の前田敬彦氏は川西編年Ⅱ期の新しい様相と見て5世紀初頭前後の製作と推定している。この年代観と一緒に出土した蓋形埴輪の様相が津堂城山タイプ古相にほぼ該当し4世紀末から5世紀前葉の時期に編年しうることを補強している。





第10図 川内一浩氏による紀伊の埴輪編年系列図 (註6 文献より転載)

けれども、第2次調整を欠き、川西編年第Ⅱ期の指標となるA種ヨコハケを伴わない本例は第Ⅲ期と見た方が妥当と筆者は考える。凸帯の特徴も台形が主体で、上下側面が内湾して角に稜をなすものは含まれていない。また、外面ナデ調整は、紀伊では第Ⅳ期の陵山古墳、第Ⅴ期の大日山43号墳などにも例があり、副次的な調整法として各期を通じた存在が確認される。

晒山1号墳の円筒埴輪（第10図右側上から1・2番目）は復原口径30cmで、口縁部が外反する器形は六十谷2号墳例と共通している。外面調整にヨコハケが認められたが、小破片のため、A種であるのかB種であるのか明らかでない。また、黒斑の有無も不明であるが、凸帯の突出度が高く、器壁が薄いこと、赤色顔料が塗布されたものが多いことに古相を留めており、川西編年第Ⅲ期に相当する可能性を考えうる。

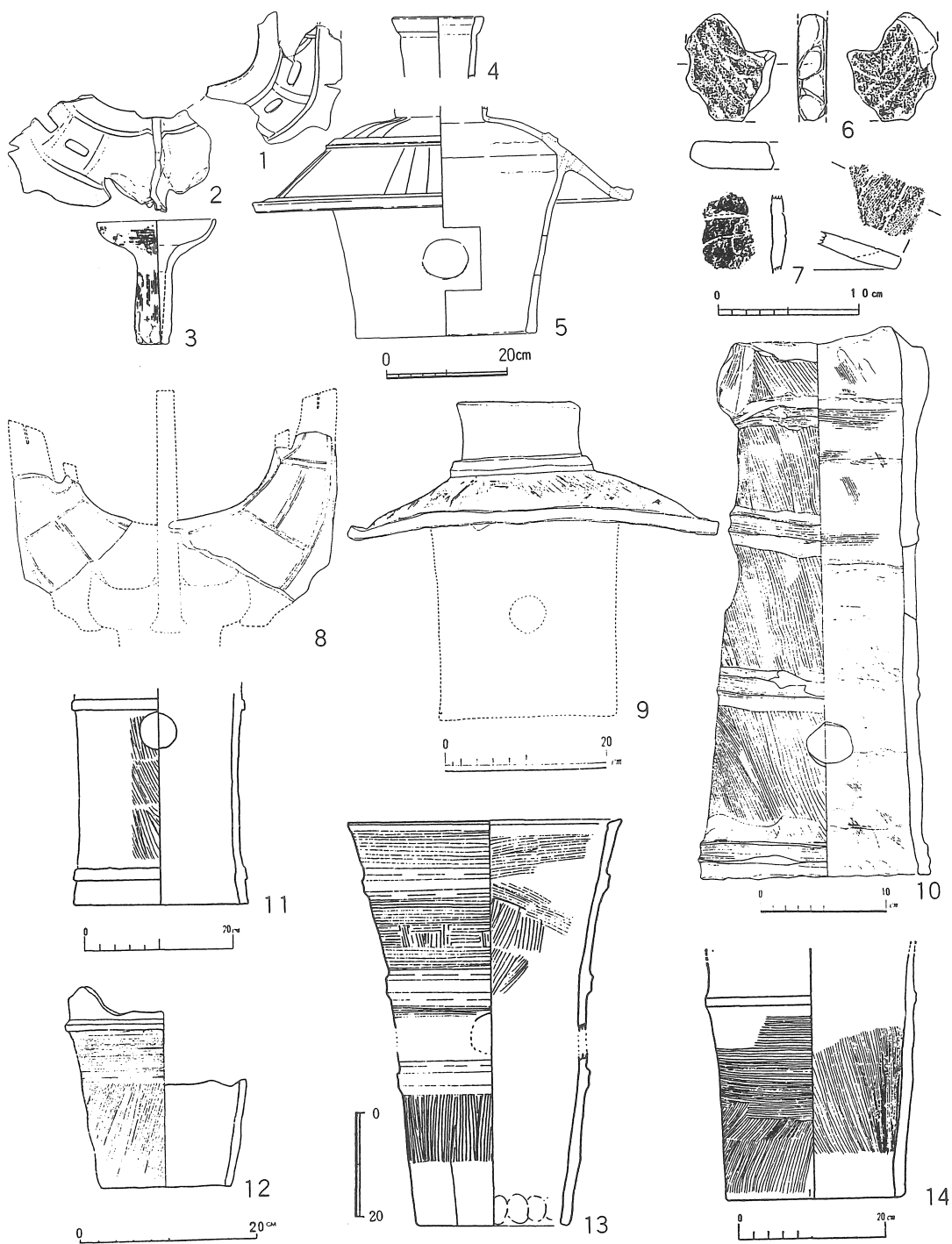
晒山1号墳からは副葬品として片面穿孔の硬玉製勾玉、滑石製白玉、小直刀などが出土している。勾玉の片面穿孔は川西編年のⅡ期以降、滑石製白玉はⅡ期では稀で、Ⅲ期以降一般的となる遺物である。また、小直刀は5世紀前半の徳島県恵解山8号墳に類例がある。したがって報告書の結論する5世紀前半という年代観は穏当なものだと判断できる。

このほか、和歌山県では初期の埴輪と考えられるものが、岩橋千塚や八王子古墳群から採集されている。河内一浩氏は和歌山県における埴輪編年を試み（註25）て、有黒斑で外面にタテハケ、断続的なヨコハケ、あるいはナデを施すものをA類とし、畿内系と位置づける。そのA類として河内氏が掲げたものとして、前述した2例のほかに花山8号墳・花山10号墳・花山36号墳・花山44号墳・八王子9号墳がある。河内氏はこれらを川西編年Ⅱ期に相当するものとして、4世紀中葉または後半に比定している。けれども、八王子9号墳と花山8号墳の提示された資料は凸帯の断面形が台形状でありⅢ期まで降るのではないかと筆者は考える。

副葬品が判明しているものを年代決定の参考にすると、花山8号墳の粘土床からは滑石製勾玉と滑石製白玉が出土しており、川西編年Ⅲ期併行となる可能性が高い。ただし、中心主体部である粘土槨からは古く三角縁神獣鏡が出土したとも言われ、今後の検証が必要である。報告（註26）では5世紀初頭前後の築造としており、中庸を得た見解と思われる。同様に、花山44号墳の粘土槨からも滑石製勾玉と滑石製白玉が出土しており、花山8号墳と同様の時期が考えられる。両古墳は岩橋千塚中の前方後円墳であり、8号墳は主軸長52m、44号墳は30mを測る。

ところで、天野末喜・松村隆文両氏の研究（註27）によると、近畿のⅢ期では、B種ヨコハケは室大墓古墳（註28）やコナベ古墳で確認されるが、なお出現率の低い傾向が指摘されており、豊中大塚古墳では確認されていないという。また、底部径20cm前後の小型円筒埴輪においてはⅡ～Ⅴ期に一貫してタテハケのみの型式を認めうるのものであって、川西編年は中型円筒埴輪にのみ対応すると結論的付けている。このことに照らすと、Ⅲ期併行と筆者が推定した埴輪にヨコハケが極めて稀なことは、小型円筒埴輪ゆえであった可能性が高い。

いっぽう、河内一浩氏は前掲書において、花山36号墳の埴輪はA種ヨコハケをもつ、有黒斑の円筒埴輪であったと述べているので、それが典型的なA種ヨコハケ（A1種）であれば、紀伊最古の川西編年Ⅱ期の資料となる可能性がありうる。提示された図には残念ながら調整痕が示されていないので、それを確認できないが、今後、計画的な発掘調査が行われ、明らかにされることを期待



第11図 蓋・倒立技法・紀伊型円筒埴輪実測図（各報告書より転載）

1～5 車駕之古址古墳 6・7 大谷古墳 8・9 井辺八幡山古墳 10 雨が谷3号墳  
 11 寺内18号墳 12 花山45号墳 13 万葉植物園内小古墳 14 花山6号墳

したい。この古墳は主軸長42mの前方後円墳で、板石が散乱する状況から主体部が竪穴式石室であった可能性が指摘されており、岩橋千塚中最古の前方後円墳となる可能性があり、平成7年度の調査で墳丘から土器片が出土していて、井辺前山24号墳（全長60mの前方後円墳）の二重口縁壺と同じく、3世紀代に溯るとの意見（註29）もある。

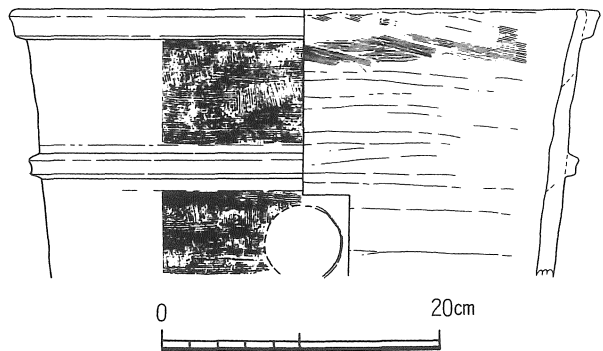
## 2 紀伊における埴輪の地域性の顕在化

川西編年Ⅳ期に相当する5世紀中葉の時期には、紀伊では埴輪製作の上で、大きな変革がなされた。それは淡輪技法と呼ばれる須恵器の技法（正確に言えば陶質土器の技法）を駆使した円筒埴輪の製作であり、植物の蔓を輪状にしたものを利用して底部を製作することと、叩き成形、回転台を利用したカキメ（C種ヨコハケ）をその指標としており、半島系の須恵器工人が製作に動員され、その独自の技術を埴輪製作に使用したことが判る。その契機は淡輪の西陵・宇度墓という巨大古墳の築造に伴って、大量の埴輪を必要としたことと、和歌山市楠見遺跡周辺部から陶質土器が大量に出土することから推定可能な半島からの亡命工人の渡来という二つの条件が織り成したものであり、紀伊独自の事情があったのである。

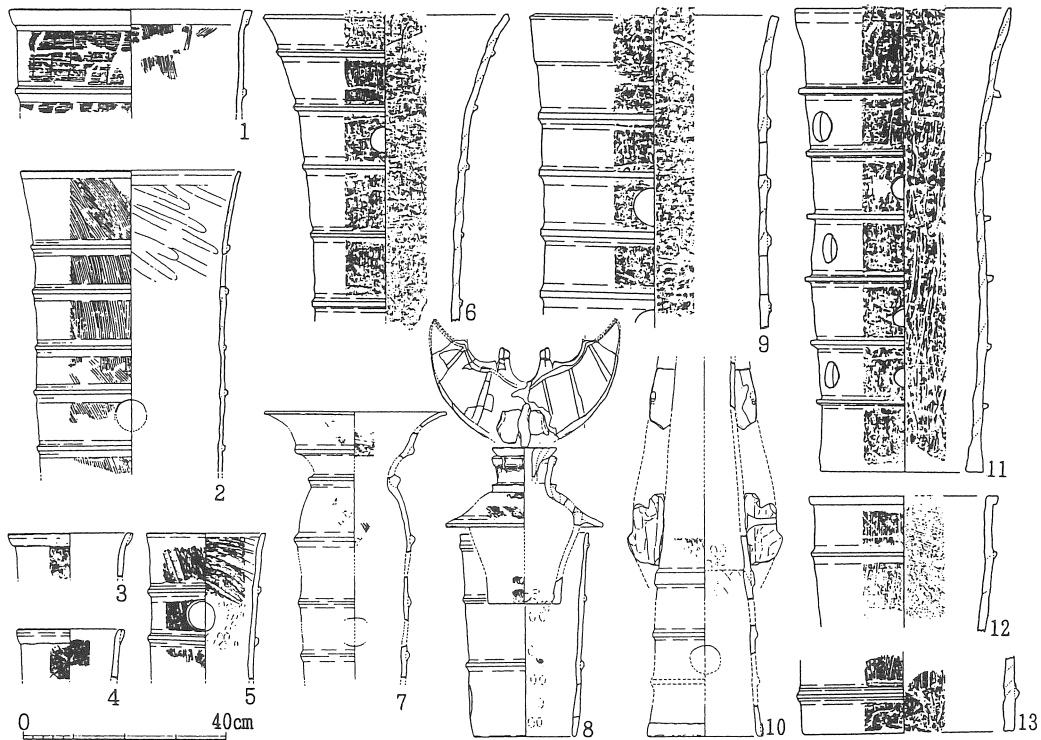
淡輪技法の円筒埴輪は主軸長83mを誇り和歌山県最大級の前方後円墳である車駕之古址古墳、推定主軸長60mの帆立貝式古墳である茶臼山古墳からも出土しており、和泉山脈を挟んだ両側に分布するが、胎土は共通しているので紀ノ川北岸で生産が行われていたと考えられている。したがって、現在は大阪府に属している淡輪も古墳時代には紀伊の最高首長の支配下にあったのであり、朝鮮半島に大將軍として出兵し、啄の地で陣没した紀小弓宿禰を田身輪邑に葬ったという伝承もあながち誇張とは言えないであろう。

淡輪技法の円筒埴輪を河内氏は紀伊における編年案（註30・第10図）の中でB類とし、独自性の高い埴輪と位置付けるが、続く紀伊Ⅲ期にはG1類の畿内系埴輪の製作技法に取って変わるとする。そして、これを畿内系の埴輪の強い規制が働いた結果と考えるが、6世紀になって再び地域色の強い埴輪H類（紀伊型）があらわれ、重層的に存在することを、新たに出現した王権の統率力の低下という政治状況下での紀伊の巻き返しと評価する。しかしながら、巻き返しはそんなに長くなく川辺三宅・布施三宅の置かれる安閑期に再び畿内系の埴輪に移行していくと説く。

また、河内氏はこの時期にはB種ヨコハケを指標とするC類が併存し、畿内系として位置づけられるとする。該当するのは鳴神Ⅴ遺跡出土例であり、類例は少ないので、この時期の紀伊においては、畿内系埴輪は客体的な存在であったと考えられよう。なお、河内氏がD類とする橋本市陵山古墳の埴輪もB種ヨコハケを伴っているので、畿内系であるが、川西Ⅳ期には稀な鱗付円筒埴輪の存在を重視し、ウナベ古墳との関係を想



第12図 車駕之古址古墳出土B類円筒埴輪  
（報告書より転載）



1・2 岡ミサンザイ古墳 3～5・7・8・10 新免3号墳 6・9・11～13 日置荘埴輪窯址出土

第13図 川西編年V期のB類円筒埴輪と伴出埴輪（註22文献より転載）

定して大和系に細分している。

引用した河内氏の見解は広い見地に立ったもので紀伊の埴輪を通観する上で、まことに傾聴に値するが、淡輪系のB類が畿内系のG類に取って代わるいっぽうで、紀伊型埴輪が新たに出現するとみるところのみ疑問がある。筆者は車駕之古址古墳の円筒埴輪に大小様々なバリエーションがあり、特に口径が40cmほどある大型円筒の口縁端部に貼付け口縁の例がある（第12図）ことを重視している。これは坂本和俊氏の分類に依れば、B1類の円筒埴輪であり、和泉の誉田御廟山古墳のものに近似している。両者とも蓋形埴輪をはめ込むための台部であった可能性が高い。このB類円筒埴輪は前述したように、保守性が強く、直口縁のA類と異なって、6世紀になってもヨコハケを残す例が多いので紀伊型埴輪の祖型となる可能性が高い。河内氏は紀伊型埴輪の成立期を6世紀前半とするが、筆者は花山45号墳の例から5世紀末と考える。花山45号墳からはヨコハケを2次調整とする円筒埴輪の第1段（第11図12）が出土している。口縁部は資料が少なかったためか図示されていないが、全体の器形が知られる鳴滝2号墳西方古墳出土例（第4図2・3）と比較すると、器形が酷似しており、他の段に比して第1段が長い特徴を持っている。このことから紀伊型埴輪とみておそらく誤りない。TK47型式の須恵器を伴っている。なお、紀伊型円筒埴輪は蓋の器台の機能従属を脱却して、普通円筒として製作されたものである。

結論すると、口縁部が肥厚することを第1のメルクマールとする紀伊型埴輪は坂本氏の言うB類円筒埴輪の一変種であり、口縁端部に凸帯は貼付しないが、かわりに口縁端部を肥厚させ、これ

を外側に摘み出したものである。祖型としては車駕之古址古墳のB I 類円筒埴輪から天神山古墳のB II a 類に至る系譜を想定することができる。したがって、紀伊型埴輪は河内氏の言う淡輪系のB 類の流れを汲むものとなる可能性が考えられる。紀伊型埴輪に最後までヨコハケが残存することもB 類円筒埴輪の保守性から理解することができるとともに、C 種ヨコハケの例もあることから、紀伊においては須恵器工人の関与が長く存続した可能性も考えるのである。

B 類円筒埴輪はTK10併行の大阪府日置荘埴輪窯址出土品（第12図）にはいっさいヨコハケを伴わないので、箱谷3号墳の実例で知られる6世紀後半代の紀伊型埴輪のヨコハケは畿内周辺では異例といえる。このことは紀伊型埴輪に極めて強い保守性が保たれたことを物語っており、畿内周縁部でありながら顕著な地方色が古墳時代中期から後期まで存続しつづけたことを確認しうるのである。

## V まとめ

紀伊においては埴輪の出現は確実なところでは川西編年Ⅲ期であり、畿内とその周辺部においては際立った埴輪文化後発地域であったことが知られる。Ⅳ期には淡輪の巨大古墳の築造と半島からの陶工の渡来を契機として須恵器技法による独自の埴輪が生産され、この技法は三重県や静岡県まで伝えられている。これらのことは朝鮮半島との関係の強い新興軍事氏族である紀氏の勃興と政治的な影響圏の拡大を反映している可能性が高い。

古墳時代後期には岩橋千塚古墳群を中心として各種の形象埴輪が前方後円墳の造出し部に大量に樹立され、埴輪文化の興隆を示したが、その中にはわが国への蓮華文の初伝をしめす双脚輪状文埴輪を含んでおり、さらに東国へも伝えられたことは拙著（註31）にも述べたところである。地理的な距離は関係なく、朝鮮半島への共同軍事行動という場で強い接点を持った北九州、紀伊、関東には埴輪文化の上でも共通の独自性を持ったのである。紀伊型埴輪に見られるヨコハケも群馬県藤岡市七輿山古墳・同県高崎市綿貫観音山古墳をはじめとする北関東のB 類円筒埴輪と共通する地域性であり、ともに6世紀後半までヨコハケを残存した埴輪を共有しているのである。

紀伊の埴輪を地元研究者の懇切な案内によって見学し、先行研究を拝読しながら小論をまとめるなかで、紀伊における埴輪文化が関東地方の埴輪文化と大きな共通項をもっていることを知ることができた。今後とも活発な研究交流が行われ、共通の問題意識の中から埴輪研究が発展することを願っている。

### さいごに

資料熟覧の便宜を頂いた久貝 健氏、川辺町教育委員会の伊奈高司氏、湯浅町教育委員会の中村アヤ子氏と畑 弘明氏、和歌山市立博物館の大野左千夫氏、そして種々御教示の上、多数の参考資料を提供して下さった前田敬彦氏、河内一浩氏、藤薮勝則氏に心から御礼申し上げます。

また、写真の掲載に付いては川辺町教育委員会、湯浅町教育委員会、滑川町教育委員会から特段の配慮を頂きました。

なお、本研究には平成12年度の財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究助成を受けることができました。関係各位に御礼申し上げます。

## 註

- 1 増田逸朗ほか「雷電山古墳の調査」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室 1981
- 2 杉山晋作・若松良一ほか『シンポジウム 関東における埴輪の生産と供給』日本考古学協会・茨城県考古学協会 2001
- 3 小山靖憲「栄谷および周辺地域の歴史的環境」『和歌山大学移転統合地発掘調査報告書』和歌山県教育委員会・和歌山大学 1983
- 4 和歌山県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅱ』－南海道・大和街道他－ 1980
- 5 近江俊秀「鴨神遺跡検出の道路状遺構」『紀北考古学談話会会報』合冊2 1996
- 6 河内一浩「紀伊における埴輪の受容と拡散」『紀伊考古学研究』第4号 2001
- 7 小賀直樹・久貝 健『箱谷古墳群』川辺町文化財調査報告書第5集 川辺町教育委員会 1984
- 8 川辺町史編さん委員会『川辺町史』第3巻 資料編 上 川辺町 1986
- 9 河内一浩「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求真能道』巽三郎先生古希記念論集 同刊行会 1988
- 10 中村 浩「出土須恵器の編年の考察」『和泉陶器窯の研究』柏書房株式会社 1981
- 11 益田雅司「供献された製塩土器」『和歌山地方紙研究』29・30合併号 和歌山地方史研究会 1996
- 12 天野末喜・松村隆文「円筒埴輪 近畿」『古墳時代の研究』第9巻 古墳Ⅲ 埴輪 雄山閣出版株式会社 1992
- 13 宇治市教育委員会『兎道門ノ前古墳・兎道遺跡』2002
- 14 もう1点加えるとすれば、ヘラ描きの波状文があろう。
- 15 註9におなじ
- 16 久貝 健『富安Ⅰ遺跡他発掘調査概報』御坊市教育委員会 1985
- 17 註9におなじ
- 18 藤藪勝則「白浜町権現平古墳群出土の埴輪」『紀伊考古学研究』第2号 1999および「白浜町権現平古墳群出土の埴輪その2」『紀伊考古学研究』第3号 2000
- 19 樋口隆康ほか『和歌山県史』考古資料 和歌山県 1983
- 20 巽 三郎「和歌山県下の形象埴輪に就いて（其の二）」『熊野道考古』2 南紀考古同好会 1962
- 21 大野左千夫・奥田 尚・前田敬彦「大谷古墳の墳丘調査と石棺材について」『和歌山地方史研究』和歌山地方史研究会 1996
- 22 坂本和俊「七興山古墳出現の背景－埴輪・屯倉・金属生産の視点から」『群馬考古学手帳』5 群馬土器観会 1995
- 23 前田敬彦『六十谷古墳群発掘調査報告書』和歌山市教育委員会 1991
- 24 園田香融ほか『和歌山市における古墳文化』関西大学 1972
- 25 註6におなじ
- 26 末永雅雄ほか『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究室 1967
- 27 註12におなじ
- 28 木許 守・藤田和尊『室宮山古墳範囲確認調査報告』御所市教育委員会 1996 によれば、第2次調整は一瀬和夫氏のいうCa種ヨコハゲが主体的である。
- 29 黒石哲夫『岩橋千塚周辺古墳群緊急確認調査報告書』和歌山県教育委員会 1999
- 30 註6におなじ
- 31 若松良一「双脚輪状文と貴人の帽子－古墳時代における蓮華文の受容をめぐって」『埼玉考古学論集』設立10周年記念論文集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991

研究紀要 第17号

2002

平成14年3月25日 印刷

平成14年3月29日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4-4-1

電話 0493-39-3955

印刷 関東図書株式会社